論　説

『聖なるゲーム』と宗教的コミュナリズム

加　藤　恒　彦

はじめに

2012年1月20日のニューヨーク・タイムズに，サルマン・ラシュディ（Salman Rushdie）が，インド北部のラジェスタン州の首都ジャイプールで開催される文学祭（Jaipur Literary Festival）への出席予定をキャンセルした，という記事が掲載された。[1] ラシュディは，『悪魔の詩』（*The Satanic Verses*, 1988年）でイスラム教を冒涜したとしてイランのホメイニ師からファトワ（死刑宣言）を出されイギリスで数年間，警察の保護のもとにあった作家であり，[2] 彼の『悪魔の詩』はイスラム教徒が多く住んでいるインドでも発禁処分にされ今に到っている。ラシュディは，声明文のなかで，インドの諜報機関から，「ムンバイの闇の世界の殺し屋が雇われ，ラシュディを暗殺すべくジャイプールに向かっている」という情報があったため，としている。その背景には，インド内のイスラム過激派指導者の「ラシュディがムスリムに謝罪しない限り抗議行動を起こす」という警告があったことや，文学祭が開催されるラジャスタン州の政府もインド政府も氏の命の安全を保証しなかった，という事情もあった。ラシュディは，警察の諜報機関による情報が事実でない可能性もある，と認めているが，他方，危険を冒すことを避けたのも無理はないと感じさせるのは，インドに於ける宗教に絡む抗争・暴力（communal violence）の危険性が今なおリアルな可能性として存在しているからである。

この記事ではインドのイスラム原理主義にしか言及されていないが，これから述べていくように，インドのイスラム原理主義は実はヒンドゥー・ナショナリズム，あるいはヒンドゥー・コミュナリズム[3] との対立関係のなかで歴史的に展開してきたものであり，両者の緊張関係が今回のラシュディのインド訪問撤回の背景にもあるのだ。そしてヴィクラム・チャンドラ（Vikram Chandra）[4] の第三作目の小説『聖なるゲーム（以下『聖なる』)』（*Sacred Games,* 2006年）[5] の中心的テーマの一つがこの宗派闘争とそれを背景とするヒンドゥー・ナショナリスト勢力による大掛かりな謀略なのである。

また，ラシュディ暗殺のためにムンバイの殺し屋が雇われた，という記事中の言及が，単な

る噂として笑い飛ばせないところにも現代インドの特徴が表れている。[6] 現実にムスリム系の有名なヤクザ組織がムンバイには存在し宗派闘争に関わっていると言われている。[7]そして『聖なる』の世界の展開の基軸をなすのもムンバイのムスリム系とヒンドゥー系のヤクザ組織の存在とその対立である。だからこの記事を読んだ時，すぐ思い浮かべたのが『聖なる』のことであった。そしてこの小説を読んでいたおかげで記事の表面的な記述の奥にある世界で何が起きていたのかが透けて見えるような気がしたのである。

『聖なる』の分析視点

『聖なる』は膨大で（900ページ余り）で複雑で，多面的な小説であり，どこに焦点を当てるかによって見えてくるものが違う。たとえば，警察官サルタージの活動から見えてくる現代のムンバイ社会，そこに生起する様々な事件，警察社会，そして政治家との繋がり，サルタージ自身の人生や恋人，母とのかかわり，シーク教徒としてのアイデンティティ等々である。また，ガイトンデの物語からはボリウッドでの成功を夢見てムンバイに集まってくる女優の卵たちの話と彼女らが遭遇する現実，ヤクザのボスとボリウッドの映画作りとの関係，ヤクザと売春斡旋業者との関係，とりわけ，新進女優を引きたて有名女優にしたてつつ，男女の関係をもつガイトンデの姿，等々である。

それらは皆それぞれ現代のインドを多面的に知る上でも面白いのであるが，この小論では，それらを捨象し，ムンバイの闇社会と大親分の一人ガイトンデに焦点を当て，闇社会の現実とそれを親分として生きる論理，ガイトンデとヒンドゥーとムスリムの間の宗派闘争とのかかわり，および，宗派闘争に絡むインドとパキスタンの双方の諜報活動等に焦点を当て，詳しく読み込んで見たい。というのは，この小説の宗派間の抗争や暴力に絡む問題がインドの大問題の一つであり，この小説でも中心的な位置を占めているにもかかわらず，書評のなかで『聖なる』をムスリムとヒンデゥー教徒の宗派闘争という観点から少し詳しく触れているものはThe New Yorkerに掲載されたもの[8] を除いて殆どなかったからでもある。また，日本でのインドに関する報道において殆ど触れられることのないのもこの側面であり，体制は大いに違うとはいえ，経済発展の面で似通った道をたどっている中国とインドの大きな違いもまたこの側面にある。ある意味で特殊インド的な大問題だからである。他方，中東やアフリカの特に北部から中部にかけては宗派闘争が社会紛争や内戦の大きな要因となっており，インドの宗派闘争を知ることは間接的にそうした地域を知ることにもつながると考える。

『聖なる』の直接的背景としてのインドの宗派闘争

だが，何の背景説明もなしにそのような観点から『聖なる』の分析に取り掛かるのには無理がある。[9] というのはチャンドラは，英語が読め，現代のインドの政治に知識のあるインドの

中産階級を主な読者に想定し，インドでベストセラーになっているからである。[10] 従って，読者にとって身近なボリウッド映画への言及やヒンディー語の言い回しのみならず，物語の展開を左右する重要な事件や事象が解説的説明なしに続々と出てくるのである。たとえば,『聖なる』の展開のなかで大きな転換点となる1992年のアヨーディア（Ayodhya）でのヒンドゥー過激派によるモスク破壊とそれに誘発されたムンバイの暴動や，それにたいする，パキスタンに支援されたインドの若いイスラム教徒によるムンバイ報復爆弾事件（1993年），またそのような展開のなかからヒンドゥー・ナショナリスト政党のBJP（「インド人民党」）が「国民会議派」に替わって政権を奪取するという政治展開等である。だが，インド人の読者にとって身近なそうした事実についてどれだけの日本人が知っているだろうか？

従って，日本人を主な読者に想定している拙論の場合，小説世界の分析に入る前に，この小論の主要なテーマであるインドにおけるヒンドゥー教徒とイスラム教徒の対立の歴史を，主に第二次大戦後のインドの独立から現代に至る時代，特にアヨーディア問題に焦点を当てながら概観しておく必要がある。

1章　イスラム原理主義とヒンデゥー・ナショナリズムの対立の歴史

第二次世界大戦後，1947年のインドのイギリスからの独立が，ガンジーを指導者とする「国民会議」派に率いられたインド民衆の非暴力的運動を力に，イギリスとの交渉による平和的形態を取ったことは日本でもよく知られている。しかし，それが，インドの「分割」，すなわちインドから分離したイスラム教国家パキスタンの創設を伴い，それに伴う住民の相互移住の際に発生したイスラム教徒とヒンドゥー教徒による大規模な相互殺戮の悲劇についてはあまり知られていないと思われる。何故，独立の際，国土が「分割」されたのか？それはヒンドゥー教徒が多数派（80%）を占めるインドで少数派（13.4%）として対等に扱われることへの不安と不信を抱いた「イスラム連盟」（Muslim League）に率いられたムスリムがそれを強硬に主張しつづけた結果である。[11] そして，その背景には多数派のヒンドゥー教徒と少数派のイスラム教徒との間の対立の長い歴史があったのである。

すなわち，4千年を超える歴史･文化的伝統を持つヒンドゥー教徒であるが，北インド地域は，16世紀の初頭に中央アジアに発するトルコ系イスラム教徒のバーブル王の侵略に屈し，ムガール帝国の時代が始まる。[12] その後，イギリスの東インド会社がインドに足場を築き始めるのが17世紀の初めのことであるが，東インド会社が貿易権を得ようとして交渉したのはインドのムガール帝国の皇帝だったのである。その後，18世紀の後半以降には東インド会社がムガール帝国を倒し，事実上インドを植民地にするのだが，1857-58年にはインド人による大反乱（Indian Mutiny）が起き，一年余りの激しい戦闘によって反乱を鎮圧した後，イギリス政府は自らが

直接植民地統治を行う体制に移行し，第二次大戦が終わるまで100年近くの間統治したのである。その間，イギリスは，イスラム教徒とヒンドゥー教徒が大反乱におけるように一致団結することを恐れ，両者の分割統治政策をとる。[13)]とりわけ決定的であったのは，独立の機運が高まってきた20世紀初頭の時期に，ヒンドゥー教徒とムスリムの団結を掲げ，政治意識に目覚めたイスラムの若者を組織していった「国民会議」派の政治的進出を前に，イギリスと保守的なイスラム教指導層は，地方議会においてインド人参事を選ぶ選挙において宗派別に議席を割り当て，個人として投票するのではなく，宗派別に代表を選ぶ「分離選挙」制度を導入したことである（モーリー・ミント改革1909年）。これは，ヒンドゥー教徒とイスラム教徒は基本的に違うのだという意識を固定化し制度化するという効果をもったのである。[14)]「国民会議」派のガンディーやネルーは，独立をめざす運動のなかで，数々の宗教暴動に彩られた植民地下のインドの状況を踏まえ，ヒンドゥー教徒とムスリムの団結を訴え，全てのインド人が平和に暮らせる世俗的・民主的国家の創設をめざしたのであるが，独立が現実のものとなるに従い，ジンナーに率いられたムスリム連盟は，すでに述べたようにヒンドゥー教徒が多数派を占める政治体制の元で暮らす事を受け入れず，イスラム教徒の分離国家を強硬に要求し，ガンディーもネルーも彼らの立場を変えさせることができなかったのである。このような人為的制度や政策を背景にする数々の宗派間の暴動の積み重ねによって生み出された長年の相互不信や恐怖感により「分離」の際の１千万人を超える大民族移動時に現代史に類を見ない凄惨な悲劇が起きたのである。

すなわち，1947年，ベンガル州の東部（現在のバングラデッシュ）が東パキスタンに，そしてパンジャブ地方西部がパキスタンに，東部（現在のパンジャブ州）がインドに分割されるのである。その結果，イスラム教徒でパキスタンに住むことを選んだ人々は東西パキスタンへと移住し，旧インド地域に住んでいたヒンドゥー教徒やシーク教徒はインドへと集団移住をすることとなる。その移住の最中にパンジャブ地方を中心に，相互の過激派による扇動によって相互的な攻撃と報復攻撃が起こり，[15)] 他宗派の人間に対する無差別の殺戮・レイプが行われるという事態が数カ月に渡って続き，その無法状態のなかで50万人から100万人が命を失ったと言われている。[16)] この悲惨な出来事は，無数の人々の心とその後の人生に深い傷と影を残し，後の宗派暴動の火種となったのである。そして「分割」後の宗派的謀略が吹き荒れるなかでネルーとともにインド国内の少数派のムスリムの命と権利を断固擁護したガンジーは，ムスリムを甘やかしたとしてヒンドゥー過激派によって1948年に暗殺される。[17)]

「分割」の悲劇は現代インドの原点の一つを成すものであり，インドの英語文学の世界でも大きなテーマとなっていて様々な作品がこれを描いている。

だが独立時に，このように悲惨な形を取ったヒンドゥー教徒とイスラム教徒の対立は，カシミール問題として未だに残っているが，インド国内では一応おさまったかに見えた。世俗的，

近代的民主国家の道を確信を持って選んだネルーの強力な指導の元で，ヒンドゥー過激派も50年代初頭の時期には選挙で民衆の支持を得ることができず，宗派政治の終焉を指摘する声もではじめた。1964年のネルーの死後，ヒンドゥー・ナショナリズムの宗教組織RSS（「民族奉仕団」）の活動家によって創設されたBJS（「インド大衆連盟」）が1967年，1971年の選挙で，545議席のうち，それぞれ25議席と22議席を確保するものの，1980年には現在のBJPとして再編され，1984年の選挙では僅か2議席しか確保できなかったのである。[18)]

ヒンドゥー教徒とムスリムの対立が再び大問題となって行くのは80年代の中盤以降である。その一つのきっかけを作ったのは，シャー・バノー（Shah Bano）訴訟である。これはシャー・バノーというムスリムの女性が自分を離縁した元夫に対して起こした扶養義務に絡む訴訟で，1985年に出された最高裁判決と，その後の国民会議派の取った政策である。下級審では，夫の側は，扶養義務を離婚後3ヶ月とするイスラム私法の規定にのっとり自分の正しさを主張したのだが，その主張が却下された結果，最高裁にまで訴えていたのである。最高裁判決は，元夫の訴えを再び却下したばかりでなく，民事領域における法は統一したものであるべきだとする憲法の規定が死文化していると指摘し，ムスリムがインド社会に統合されるためにもそのことが必要だとコメントをした。この最高裁の判決はムスリムへの批判として受け取られ，ムスリムの保守派・聖職者は一斉に判決を批判するとともに，元妻を断罪し，追い詰め，主張を撤回させたのである。[19)]

「国民会議」派とラジェヴ・ガンジー首相は当初，世俗主義に基づく最高裁判決を支持していたが，北インドのムスリムが多い州の一連の国会議員補欠選挙で国民会議派の候補が敗北すると，一転して1986年2月には，ムスリムが関わるばあいには現行法の対象外にするという法案（Muslim Women's Bill）を議会で通し，最高裁判決を覆し，ムスリム保守派の宗派的要求に妥協したのである。[20)]

もう一つはアヨーディア問題である。ラジェヴ・ガンジー政府は，この問題では，逆に，ヒンドゥー・ナショナリズムの暴走を制止せず，法と秩序に基づく世俗的民主国家という理念を裏切ってしまう。

アヨーディア問題は，90年代のヒンドゥー教徒とイスラム教徒の宗派闘争と暴力を象徴する事件であり，この闘争を通じBJPはヒンドゥー教徒の支持を急速に伸ばし政権の座を獲得するのである。アヨーディア（Ayodhya）は，北インドのウットラ・プラデーシュにある町でヒンドゥーの二代叙事詩のうちの一つ『ラーマーヤナ』の主人公，理想的な人でヴィシュヌ神の化身とも言われるラムの生誕の地とされて来た。しかしムガール帝国のバーブル王が16世紀の初めに北インドを侵略した際，アヨーディアに建立されていたラム寺院が，破壊され（1528年），そこにモスク（Babri Masjid　バーブルの寺の意）が建立され，それ以来この地はヒンドゥー教徒にとっては歴史的屈辱の象徴としての意味を持ち，宗派的係争の場となってきた。

[21] イギリスは，ヒンドゥー教徒の為に寺院の外に祭壇を設け妥協策としたが，独立後，寺院の内部に幼いラムの像を祀る祭壇が造られ年に1度だけ礼拝が許される事となり，それが法によって固定化されてきた。しかし，RSSの強いイデオロギー的影響の下に，より広範な人々を組織する目的で設立されヒンドゥー･ナショナリスト団体VHP（「世界ヒンドゥー協会」）[22] が，1984この問題を全国的争点にするという戦略のもと，モスクの内部のヒンドゥー教の社にかけられた鍵を開け，閉じ込められたラムを解放せよと主張する。[23]

その背景には80年代に入り，独立後，憲法によって権利を認められていた「後進階級」（OBCs=Other Backward Castes）や以前の不可触民の権利要求が強くなり，従来の支配階級の既得権を侵し始め，ヒンドゥー教徒内部のカースト間の対立が激しくなるという状況があった（1990年のシン首相による「マンデル委員会の答申実施」提案による波紋)。アヨーディア問題はそのようなヒンドゥー内部の分裂を回避し，イスラム教徒への歴史的な恥辱を晴らし，ヒンドゥー教徒としての誇りと団結を強化するという狙いがあったと指摘されている。[24]

そうしたなかで，アヨーディアの地元弁護士が地方裁判所に，鍵を開けお参りができるようにせよ，と訴えを起こす。そして1986年1月には地方裁判所は，その訴えを認める判決を下す。しかしその地方裁判所の決定は，党内の保守派の声に従ったラジェヴ首相の意向に沿ったものであった。政府は，扶養法の適用に絡む訴訟の場合とは逆に，今度はヒンドゥー過激派におもね，多数派のヒンドゥー教徒の選挙での票を念頭に置いた無原則的な立場を取ったのである。それに勢いづいたVHPは，要求をさらにエスカレートさせ，モスクそのものを打ち壊し，その場所にヒンドゥー寺院を建立すべきと主張し全国的な運動を起こす。[25]

そのような動向を次にのべる二つの出来事がさらに加速する。ひとつは，夫の死後後を追って焼身自殺（サティ）を遂行した女性が現れ，ヒンドゥーの鏡だと賞賛されたことであり，もう一つは，『ラーマーヤナ』が国営テレビで1年数ヶ月に渡って放送されたことである。テレビの普及の時期と重なり，8千万人が見入り，放送の行われる毎日曜日の朝には通りにひと気がなくなった，という。これをきっかけに，それまで地域ごとにそれぞれ違ったヒンドゥー教の神を信仰しバラバラであったヒンドゥー教徒が，ラムをヒンドゥー教の最も重要な神だと見なすようになり，ヒンドゥー教徒としてのまとまりが生まれ，VHPの運動の高揚に貢献したという。[26]

だがこの運動はVHP単独のものではなかった。すでに述べたRSSやその政治的組織であるBJPやヒンドゥー・ナショナリズムに合流しつつあったムンバイの「シブ・セナ」(Shiv Sena）等が加わっていた。BJPの指導者アヴァニ（Avani）は，1990年の9月末にグジャラット州から5週間かけてアヨーディアに向かう大デモンストレーションを行い，途中の町々で「世界ヒンドゥー協会」の戦闘的な活動家と修行僧（Sadhu）たちに守られながら集会を行い，国民会議派政府が，少数派のムスリムの機嫌を取り，多数派のヒンドゥー教徒の利益をなおざり

にするとして政府を批判し，そしてアヨーディアにラムの寺院を建てる事こそヒンドゥー教徒の利益であり願いなのだ，と訴えた。この大行進は，すでに行く先々で治安の悪化や暴動を引き起こし，さらにはアヨーディアのモスクの破壊を目的としていた。ラジェヴ首相が暗殺された後首相となったV. P. シング（Singh）首相は，これを抑える必要を感じたが，それはラム神に対立していると取られることでもあり，行進がデリーに到着した時にも政府は何もしなかった。結局アヴァニはBJPと激しく対立するビハール州の知事の命令で予防拘束されたが，全国から集まった何万というボランティアの活動家はそのままアヨデーディアに向かい3日に渡り治安部隊との衝突を繰り返し，その一部はモスクにたどり着きヒンドゥー教を象徴するサフロン色の旗をモスクに立て寺院を破壊しようとした。その騒動の中で20人以上の活動家が死亡し，その位牌を携えてVHPが北インドの各所をまわり，ヒンドゥー教徒の怒りを掻き立てムスリム住民への暴動を引き起こした。[27)]

そしてそれに一役買ったのが新聞，特にヒンドゥー語の新聞であり，出来事の推移を「宗教的熱狂をもって報道した」のである。[28)] そして1991年の総選挙でBJPは大きく議席を伸ばし，アヨーディアの位置するウッタル・プレディシュではRSSの古参活動家が州政府のトップとなりシング（Singh）首相は退陣する。VHPとRSSは引き続きアヨーディア問題を中心課題とし，Masjid寺院の横の土地を買い更地にし，次には寺院の破壊作業とヒンドゥー教の寺院の建設を始めた。それは，現状維持を命じた裁判所の命令に反していた。だがRSS系のウッタル・プレデッシュ州政府は，その法令違反を見て見ぬふりをしていたのである。現地に調査委員会を派遣しそのことを知った新任のラオ（Rao）首相は，州政府を中央政府の直轄にすることも検討するが，結局妥協的な話し合い路線しかとれない。そうするうちにVHPは，1992年12月6日にMasjid寺院を打ち壊すという方針を全国的に明らかにし，全国からからウッタル・プレデッシュに宗教的ボランティアが集まってくる。ラオ首相は知事をデリーに呼び寄せ，最高裁判所の決定に今後のアヨーディアのことは任せるよう説得を試みるが，RSSを支持する知事は，全面解決は，寺院をヒンドゥー教徒に手渡すことしかないと言い張る。12月6日には10万人のVHPのボランティア活動家（Kar Sevak）が三叉の槍に弓矢を持ちアヨーディアに集まり，モスクを倒壊させたのだ。[29)]

この出来事はヒンドゥー教徒の熱狂とムスリムの憤激を呼び起こし，インド各地で宗派暴動をひきおこした。それがひときわ激しかったのはムンバイであり，ヒンドゥーとムスリムの間の無法の殺戮行為が大規模に発生した。[30)] そしてその数ヶ月後，今度はヒンドゥー教徒に対するムスリムによる報復的時限爆弾攻撃がムンバイの繁華街で行われた。そしてそれはドバイに拠点を置くムスリムのヤクザの親分に指揮された作戦だったのである。[31)]

それ以来，毎年アヨーディアで記念祭が行われ，沢山のボランティアがそれに参加し，2002年にはその記念祭の帰りの列車がムスリムに放火されたという噂がグジャラット州での大暴動

に発展し，2,000 人が殺害されるという事件になった（ゴードラ事件）。しかも州政府が暴動を取り締まろうとしなかったのである。[32] そしてこのようなヒンドゥー教徒とイスラム教徒の間の宗教的抗争は今に至るまでインド各地で吹き出しつづけているのである。

こうして 80 年代中盤以降から 90 年代を吹き荒れた宗派闘争と暴力の応報は，現代インドの最大の問題の一つとなったのだが，問題は，何故民主主義的制度が定着し，インドの資本主義的経済発展が新たな時代を迎えるこの時代に宗派闘争という一見すると前近代的な問題が前面に出てくるのかと言う点である。

その理由の一つは，グーハーも指摘しているが，ネルーの死後，とりわけ非常事態体制（1975-1977）後の民主政治への復帰の時代のインドの政治が皮肉にも民主主義という制度自体に内在しているポピュリズム的傾向に動かされたことにあると考えられる。すなわち，農村や都市のスラムに住む多くの貧しく教育を受けていない人々（1991 年の時点でのインド全体の識字率は 52％台である [33]）は，民主主義制度のもとで権力の座を目指す諸政党にとって，大きな票田として重要な意味を持ってくるのであり，彼らの支持を得る最も容易な方法の一つは，すでに紹介したグーハのこの時期の政治分析によってもわかるように，彼らが根深く持っている地域主義や宗派的意識や偏見に訴える，あるいはそれにおもねることである。Shiv Sena（シブ・セナ）がマハラシュトラ州に流入してくる南部移民への州民の反感に訴え支持を伸ばし，やがてヒンドゥー・ナショナリズムに合流したことや，[34] すでに述べたように BJP がアヨーディア事件によって人々のヒンドゥー教徒としての意識を掻き立て支持を集め，1998 年には中央政権を取ったことにも示されているように，宗派対立は民主主義制度の一環としての選挙に勝利し政治的躍進を実現する格好の手段となったのである。その意味で民主主義のもとでの選挙民の意識に沿ったポピュリズムで 80 年代から 90 年代にかけてのインドの政治は動いて来たと言えるのではないだろうか？

しかし，インドの民主主義は，そのような否定的な意味ばかり持っていたわけではない。「後進カースト（OBCs）」や元不可触民（Dalits）もまた大きな選挙母体であり，彼らの要求を背景に，政治が彼らの権利の前進を図ってきたこともインドの 80 年代の政治の大きな特徴でもあった。[35] そして BJP の場合，政権を取るとグローバリゼーションの時代的要求に答える経済政策を取っているのである。

第二に，非暴力・不服従の運動でインドを独立に導いたガンジーの遺産が，貧しく教育を受けていない庶民の間では定着しなかったという点である。ガンジーはむしろ，ヒンドゥー的伝統のなかで現代の聖人としてインドの庶民には受け入れられたのである。[36] 逆にいえば，ヒンドゥー教やイスラム教のなかに伝統的にある報復的暴力肯定の思想はそのまま残っており，宗派暴動のなかで燃え上がっているのである。

第三に，80 年代の中盤以降は，経済の自由化の進展と中産階級の形成が急速に進み，それを

基盤とした，メディア（新聞，テレビ等）が普及し始める。それは，様々な事件や問題が直ちに全国化し，国民的関心となることでもある。しかも客観的で中立の立場を取るべき新聞，特にヒンドゥー語の新聞が，逆に闘争を煽り立てる記事を書き，問題を悪化させたという事情もあった。そのような経済発展による情報基盤の整備は，宗派的対立を全国的なものにし，煽り立てる手段ともなる。そして，ヒンドゥーとムスリムのナショナリズム組織や政党がその役割を担うべく登場し，民衆の怒りを煽り立てることで支持を得てゆくのである。つまり，宗派的イデオロギー対立の構造が温存されたまま，それが新たな経済発展の基盤の上で全国化される時代を迎えるのかも知れない。ビジネスや科学・技術の発展が伝統的宗教意識や宗派的対抗意識と奇妙に同居し，後者の意識を煽りつつ，政権を取り，政権の座を取ると，グローバリゼーション時代の科学・技術政策や経済政策を追求するというところに現代インド政治の特徴が存するのかも知れない。

第四に，これは，『聖なる』やナイポールの三作目のインド紀行[37]でも触れられていることなのだが，ビジネスの発展や科学・技術の発展は自動的に伝統的信仰心の否定には直接つながらず，教育のある層の間でもコミュナリズムへの傾斜が可能であるという点である。

2章　『聖なるゲーム』の分析

物語の設定とテーマ

ムンバイ北部郊外を管轄する警察署の警部サルタージ・シング（Sartaji Singh）は，ある早朝，匿名の電話で起こされ，国外逃亡中の有名なヤクザの親分ガネーシャ・ガイトンデ（Ganesh Gaitonde）がムンバイに居るという情報を得，部下を連れて逮捕に向かう。ガイトンデが潜伏しているという白い立方形の建物は異常に頑強で，中に入るためには重機器の助けまで要する。そしてその建物のなかでサルタージが発見したのは銃で自殺したガイトンデと，同じく銃で殺された女性の遺体であった。そしてそこに突然，インドの中央調査局（CBI）の職員が現れ，これは国家安全保障上の問題のからんだ事件なので今後は彼らが扱うことになるという。そしてそれから数日後，サルタージは副署長のパルルカー（Parulkar）に命じられ諜報機関の女性部員アンジャリ・マスー（Anjali Mathur）と会い，密かにガイトンデについての調査を命じられる。ガイトンデはムンバイから突然姿を消し外国を拠点に活動しているという情報があったのだが，その彼が何故密かにムンバイに戻り，何をしていたのか，またガイトンデと一緒にいて殺されていた女性は一体誰なのか，をサルタージは極秘で調査を命じられたのだ。

こうして物語は，諜報機関の指示のもと，ガイトンデの自殺の背景についての調査を進めるサルタージを三人称で描いた章と，ガイトンデが自殺するまでの自分の過去をサルタージに語る章を交互に重ねながら展開し，先に述べた「謎」に迫るのである。この意味では『聖なる』は，

推理小説的要素を持っている。

また，そのような物語の構成からも窺えるように，チャンドラは，ガイトンデをこの小説の第一の主人公に据え（サルタージは，その意味では副主人公である），彼がどのようにしてムンバイのヤクザの世界で頭角を現し，そのドンの一人となり，警察や政治家との関係を深め，やがて「国家の安全保障に関わる」ヒンドゥーとムスリムの過激派間の闘争に巻き込まれて行ったのかを描いているのである。ガイトンデが巻き込まれていたのは，ムンバイでムスリム過激派を装った組織による核爆発を引き起こし，インドとパキスタンとの間の全面戦争を誘発しようとするインドのヒンドゥー過激派の謀略である。

日本人からすれば荒唐無稽にも思えるこのような筋立てが，インドにおいては必ずしもそうとは言えないのは，この小説の発表から 2 年後の 2008 年 11 月には，ムンバイの「インド門」に面したタジ・マハール・ホテルを始めとした各所でイスラム過激派による大規模なテロ攻撃があり，160 人を越える人が犠牲者となり，世界中で報道されたりするからである。この事件でも，インドを国家安全保障にとっての最大の脅威とするパキスタンの諜報機関 ISI（Inter-service Intelligence）がムンバイを攻撃したイスラム過激組織を支援していたという情報があるが，[38] この小説のなかでもインドとパキスタンの双方の諜報活動や，それに人生をかけた人々の物語がガイトンデの物語と関連して，ある場合には独立して描かれていて興味深い。

このように『聖なる』は，ムンバイのヤクザの世界や大掛かりな国境を越えたスパイ・諜報活動や謀略活動が絡み合うスケールの大きな政治小説でもある。

ラウンド・キャラクターとしてのガイトンデと分析視点

しかし，『聖なる』の主人公ガイトンデは，政治小説にありがちな，筋立てに利用されるだけのフラットな性格としてではなく，強烈かつ複雑な個性を持った一人の人間として豊かに多面的に描かれていて文学的分析の対象としても魅力がある。

すなわち，ガイトンデの性格の特徴やその成り立ちそのものが，プロットを動かしてゆく。ガイトンデのヤクザ世界で頭角を現して行く過程や，ヒンドゥー過激派のグールーにガイトンデが惹きつけられ，利用されて行く過程に彼の性格が大きな役割を果たすのである。そしてその性格は，自分の父親への恥辱と拒否，真の父親への強烈な憧れを原動力にしている，とも読めるのである。そしてガイトンデは彼の性格の帰結として自ら死を選ぶ。従って，この小説はガイトンデの性格の分析と理解無しにはその展開を説明できないのである。つまり『聖なる』の性格小説たる所以である。

もう一点つけ加えるならば，『聖なる』は，ガイトンデのアイデンティティの模索の物語でもある。これはすでに述べた父親探しのモチーフとは異なり，国家や宗派闘争におけるガイトンデ自身の立ち位置に関わる問題である。

この小論においてはそのようなガイトンデの人間的側面にも着目しつつ，ガイトンデがどのようにしてヤクザの世界に入ってゆき，親分にのし上がっていったのか，そしてその世界がどのようにして警察や政治家と結びついてゆくのかをまず分析してみたい。そこからはムンバイにおいてヤクザの世界の存在や警察・政治家との癒着を許容する社会的条件の存在が浮かびあがってくる。

そしてガイトンデガが何故，どのようにして宗派的ポリティクスの世界に巻き込まれて行くのか，そしてヒンドゥーのグールーとしての仮面の裏に恐ろしい陰謀を企てるヒンドゥー過激派指導者の思想とはどのようなものなのか，また，インドのパキスタンの間の苛烈な諜報活動のせめぎ合いの歴史と実態に焦点を当て明らかにして行きたい。

その上で，まずガイトンデがどのようにしてムンバイのヤクザの世界で成り上がってゆくのか，そこに貫かれた論理と，そしてそれを支える社会的条件について検討してみよう。

＊＊＊

ガイトンデの黄金伝説とその裏側

堅固な隠れ家に立てこもったガイトンデは，逮捕に来たサルタージにスピーカーを通じてムンバイのヤクザとしての自分の人生の原点となった黄金伝説について語り始める。ガイトンデは 19 歳のときの最初に参加した外国との取引で金の延べ棒を手に入れ，パリトッシュ・シャーというムンバイの闇金融界の大物を探しあて，延べ棒を現金化し，それを彼の事業への元手にし，後の成功に繋げてゆくのである。(S.G. pp. 51-68)

しかし，この黄金伝説はムンバイのヤクザの大親分ガイトンデの成功物語の原点として新聞等でのインタビュー記事を通じ，すでに世間に広く知られていることであった。[39] だが，1 箇所ガイトンデがこれまで世間に隠して語らぬ部分があった。ガイトンデがサルタージに語る物語は（そしてガイトンデの独白の全てが），今初めて彼が語る自分の人生の虚飾のない告白であったのだ。すなわち，ガイトンデは，とある外国の海岸近くの小島での外国人との取引で，親分のカカが，用意した荷物と引き換えに金の延べ棒の入った重い袋を手に入れ踵を返し帰路についた直後，その黄金の簒奪を決意し，手下からの裏切りなど予想してもいなかったカカが背を向けたまま小川を渡ろうとして足を入れた瞬間銃で殺害したのである。(S.G. pp. 34-41) ここに見られるのは彼の人生を一貫して貫く並はずれた成功への野心である。しかし，世間には，自分を信頼し，ヤクザとしての心得を教えてくれた親分を裏切ったことは知られたくなかったのだ。この自己美化への欲望が彼の野心とともに存在し彼の人生を支えるのだ。しかし，人は騙せても自分は騙せない。カカは亡霊となり，眠れぬ夜を過ごすガイトンデの目の前にことあるごとに現れ彼を悩ますことになる。

ガイトンデと G-Company の軌跡

ガイトンデはG-Companyという会社を興すのだが，その事業の出発点としてガイトンデが重視したのは土地であった。ガイトンデはムンバイの北部郊外のゴーパルパースという地域の持ち主のいない土地を市の役人に賄賂を使い，安く手に入れ，その土地で住宅開発を始めようとする。将来そこに移り住む人が増えることを見越したのである。だがそこに問題が生じる。土地の顔役が勝手に事業を始めることを許さなかったのである。つまり商売の利益の幾分かの分前を要求したのである。そこで話し合いが持たれるが，ガイトンデはその最中相手の隙をつき，手下と一気に相手を殺害する。こうしてゴーパルパースでの彼の事業は始まるのである。（S.G. pp. 107-111）

つまり，住宅開発という合法的な事業の出発点には，地元の顔役の暴力的抹殺があったのである。最初のボスのカカの殺害による事業の元手の獲得と同様に，彼の事業の飛躍的展開のたびに暴力が決定的な役割を果たすのである。またこの事件はインドにおけるビジネスがよって立つ前近代的土壌を示唆している。土地を買い取り住宅販売を行うという単純なビジネス行為にさえ地元の顔役への金銭的配慮という前近代的しきたりが絡んでくるのである。ガイトンデが取ったその顔役を殺害するという手段はそのしきたりそのものに抗うということではなく，自からが顔役の座を簒奪することによって余計な金を支払うという無駄を排除することなのである。そしてそのために行使されるのが暴力であり，そのために彼は人を組織し，武器を確保することによって暴力の組織的基盤＝ヤクザ組織を持つのである。しかしそれは単に単純な暴力の行使ではなかった。一気に相手との勝負を決するその前に，ガイトンデは相手のことを徹底的に調べ上げていたのである。つまり情報収集である。もう一つの成功の秘訣はグループを率い部下に命令を下すその能力にある。ガイトンデは，普通人は皆愚かであり，命令をくだすことができず，命令を下すことのできる人間に従うのだ，という人間観を持っていた。（S.G. p.111-112）そして自分が上に立ち，計画を立て，命令によって部下を組織的に動かすことによって最初の戦いに勝利したのである。

もう一つ重要なことは住宅開発建設という事業そのものに彼は決して手を抜かなかったことである。こうして彼は信用を得たのである。こうしてガイトンデの事業の評判はムンバイの北部や東部地域に広まる。そして顔役という前近代的役割を簒奪したガイトンデはその役割と特権を自からが行使するのである。ガイトンデの家には地域住民が様々なことを頼みにくるようになる。家族の仕事や水道や電気の設備の敷設についての依頼，ビジネスマンどうしの揉め事の仲裁，地元商店の保護を名目にした金集め，つまり，近代的市民社会であれば本来市役所や警察，裁判所と言った公的機関がやるような仕事を請負う代わりに保護者としてお金を商店や事業者から集め資金を調達し，部下を雇ったのである。そしてガイトンデは地域の警察官との関係でもお金を握らせ友好的な関係を築く。そのようななかでサマントという警部補とも懇意

となる。（S. G. pp. 111-112）

こうしてムンバイのヤクザ組織は近代化の未成熟が生み出した社会の隙間に育ち，ある意味ではそれを補完している構図が見えてくる。

こうして見てくると，ガイトンデはビジネスマンとして成功を収める素質と野心を豊かに持っていたのだろう。だが，その素質と欲望を現実性に転嫁させるためにはガイトンデの場合，カカの殺害において見られたように，暴力という手段以外にはなかったのかも知れない。ちなみに，ブッカー賞を2008年に受賞した *White Tiger*[40] はバンガローレで成功した実業家の成功の原点を描いた作品であるが，物語の大半が，富豪のお抱え運転手となった貧しい農村育ちの野心的な青年が，自分の人生の未来を切り開く唯一の方法として，自分の主人を殺害し金を奪うことを選択するに至る過程を描いている。両者に共通するのは，恵まれぬ境遇に育ち，成功の野心に燃える若者が成功のための唯一の手段として自分の主人を殺し，富の簒奪を企てるというモチーフである。これは西洋文学の伝統のなかでも見受けられるモチーフであるが，貧しい農村を背後に富の世界が新たに開けてきたインド的文学的モチーフと言えるのかも知れない。

Cobra Gang との闘い

ガイトンデが次に取り組んだのは東に隣接するコブラ・ギャング（Cobra Gang）という大きなヤクザ組織との闘いであった。それが戦いとなったのは，ガイトンデが縄張りを拡大したいという野心を強烈にもっていたからだ。彼には現状維持という言葉はなかったのである。そしてそれは必然的に組織同士の戦争へと発展する。その戦いに向けて彼は準備をし，「憎しみや怒りを抱くことなく戦い，そして勝利するのだ」（S.G. p. 110）と決意する。ガイトンデには感情に流されず冷静に状況を判断する理性があるのだ。その準備とは敵についての情報収集であり，武器や弾薬の確保である。しかしそのような動きはやがて相手にも気づかれ，ある日逆に攻撃を受け肩に銃弾をうける。こうして組織間の戦争が始まるのだが，戦況はよくない。そのようなときにかれに知恵を与えてくれたのはある女性であった。ヒンドゥー教の神様の一つ，ガネーシャを祀る寺院の占い師のような女性である。彼女はこのまま戦い続けると必ずおまえは殺されると予言し，勝つためには「相手の大将の首を奪え」（S.G. p.124）という。それも表にでている大将ではなく裏で操っている本当の大将である。その大将とは，コブラ・グループのなかで，徹底した情報収集にもかかわらず誰なのか，何をしているのか，ついにわからなかった男である。

その男をガイトンデが「始末」する方法は，まさにインド的，あるいは途上国的である。ガイトンデは，なんとゴーパル・パースでこれまで協力関係を取り結んできた警官のサマントを買収するのである。その警官は，立場上その正体不明の男をよく知っていて，かつ手入れを装

い合法的に相手を射殺できる立場にあったのだ。その警官を説得する際にガイトンデは，コブラ・ギャングより自分にはより将来性があり，今自分に協力すれば将来に渡ってお前の利益となる，と言う。そして警官に支払う多額の金を確保するために宝石店を襲い，計画が首尾よく遂行されるのを待っている間，相手組織の攻撃から自分の身を守るために宝石店強盗の疑いでその警官に逮捕してもらい，監獄に避難する。（S.G. pp. 116-130）

きわめて合理的に行われるこの殺人は，今なおインド社会の最大の問題の一つ公職に就くものの腐敗の構造[41]を利用して行われたのである。

だが，文学的に興味深いのは，対抗組織の影のボスの死体を見たときのガイトンデの反応である。ガイトンデは，その影のボスが自分とそっくりな顔つきをした男であることに気づくのだ。しかし誰１人としてそうは思わないようであった。ガイトンデはそのことで内心動揺する。どうして他の連中はこの類似性に気付かないのか？またこのように似た者同士が殺し合いをするというのは何を意味しているのか？と思うのである。（S.G. P.130）この印象深い場面は一体何を意味するのであろうか？恐らくガイトンデは外見そのものというより，外見に刻印されたその男の内面性を直感し，自分との類似性に気づいたのではないだろうか？

こうしてガイトンデは敵の組織を壊滅させシマを乗っ取る。次に彼は自分への待ち伏を手引した部下で逃亡していた男を捜索させ自分の前に連れてこさせる。その男は家族を殺すぞと脅迫され，ガイトンデの行動予定をもらしていたのだ。ガイトンデは他の部下を即座に呼び寄せ，自分を裏切った男の手足を一本ずつナタで切ってゆくという残酷なやりかたで殺し，自分への裏切りの見せしめとする。（S.G. p.133）

政治家とのつながり

次にチャンドラが描くのはガイトンデとヒンドゥ・ナショナリズムの政治家との関係の始まりである。恐らくは80年代終盤の，ラジェヴ・ガンジー首相のもとでの経済の自由化への転換期だと思われるが，同時にヒンドゥー・ナショナリズムの政党が勢力を急速に伸ばす時期でもある。チャンドラは民主主義のもとでのインドの選挙がどのような実態を持っているのかを具体的に描いていて興味深い。

ガイトンデは，闇の金融業者であり今では自由化の流れに乗りムンバイで広く事業を展開し，航空業界にも乗り出しつつあったパリトッシュに紹介され，ある政治家と関係を持つようになる。その政治家とは，「タミールからの移民にいやがらせをすることによってムンバイの『土地の子的郷土愛』」（S.G. pp. 219）を強調していたが，勢力を拡張するに従いヒンドゥー・ナショナリズムを唱えるようになった政党ラクシャック Rakshak（Shiv Sena のこと）から初めて政界に打って出る若い政治家ビピン・ボンズル（Bipin Bhonsle）である。ビピンが立候補しようとしている選挙区は伝統的に国民会議派が強い地盤であり，貧しいムスリムやホワイトカ

ラーや専門的職業人たちのすむ地域である。ビピンがガイトンデに協力を求めたのは，今回初めてここから立つこともあり組織の財政的・人的援助が十分でなく彼の運動員が地域に行くと会議派の運動員に襲われポスターを奪われ焼かれたというのだ。ガイトンデの役割はそれに対抗する物理的力を提供し，会議派の支持者が多い地域の住民が投票しないようにすることである。民主主義制度の下での選挙とはいえ，その内実は金で雇われたヤクザが力を発揮するのである。事業家のパリトッシュにとってはRakshakのように反ムスリムの立場からヒンドゥー教の過去の栄光やヒンドゥーの血や土地と言った観念のために闘うことは気違いざたである。だが，ガイトンデは，そのような狂気のなかにも自分たちを雇うことによって自分たちが反対勢力の側につくことを防ごうとする理性的計算が働いている点を指摘する。ビピンが去った後二人は幾らでこの仕事を引き受けるのか相談する。だがすでに選挙戦にはこのようなことがつきものでありすでに相場というものがあるのだ。いわば選挙結果を金で買えるシステムができあがっているのだ。だがガイトンデには政治的野心など全くない。ガイトンデには政治家に関する彼自身の怒りに満ちた経験があり，その嘘と偽善にあふれた汚ない世界には反吐がでるほどの嫌悪感をもっていたのだ。（S.G. pp. 242-245）

選挙戦

貧しい選挙民への国民会議派のやり方は色々な物を配ること，とりわけ効果があるのはマトンの肉である。これで貧しい選挙民は候補者が選挙の時にした約束を少しも守らなかったことも忘れてしまうのである。

ガイトンデの選挙作戦

国民会議派が強い地域の住民が投票に行かないようにするためにガイトンデが取った作戦は，反対派候補がヤクザを雇い投票に行こうとする連中を襲おうとしているという噂をまず流すことである。噂が噂を呼び選挙民の心に恐怖心が植え付けられる。そして選挙の当日の早朝，オートバイに乗った荒くれ者が炭酸ソーダの入ったビンを振り回しながら選挙民の住む通りを走り回りその瓶を破裂させる。炭酸ソーダなので実害はないが，割れたガラスが飛び散る勢いは，襲われるという噂とあいまって恐怖心を植え付けるには十分である。警察官もやってくるがすでに買収されていて本当に選挙民の投票権を守る気などない。こうしてビピンは初めての選挙でマハラシュトラ州議会の議員の席を買いとったのである。

パリトッシュの娘ディピとダリットの青年との恋―カースト制度の壁とガイトンデ

この時期ガイトンデのカースト制度や宗派的抗争にたいする意識を知る上で重要な事件がおきる。それは彼の盟友パリトッシュの娘とかつての不可触民ダリット（Dalit）の青年との恋

にたいするガイトンデの態度である。パリトッシュは，ガイトンデが手に入れた黄金を換金したムンバイの闇の金融家であり，優れたビジネスの才能をもち，規制緩和されつつあったインドの航空業界にも参入しようとしていた。ガイトンデとは，ビジネの世界で協力しあってきた盟友であり，友人でもあった。ある日，ガイトンデはパリトッシュの娘で，年頃のディピから思いつめた相談を受ける。大学でダリットの青年と恋に落ち結婚したい，でなければ死ぬ，というのだ。父親のパリトッシュや家族の反対は目に見えているのでガイトンデに仲介役を頼んだのである。では何故，それがガイトンデだったのか？娘はガイトンデが彼のヤクザ組織を宗派やカーストにまったく捉われず運営しているのを見て，彼なら話がわかり助けてくれると判断したのである。だがそれが一筋縄ではいかないことをガイトンデは知りつくしている。パリトッシュにしてもビジネスの上ではカーストに捉われないのだが，娘の結婚相手がダリットということになると保守的であり，また沢山いる親戚の意見を無視するわけにはいかない。まだダリットへの偏見に捉われている人がたくさんいるのである。そうした人々が，親戚にダリットができると自分たちの未婚の娘や息子の結婚相手が居なくなってしまうと心配し，かつ腹を立てることは目に見えている。ガイトンデは人の偏見に満ちた心という壁の圧倒的な力の前に途方に暮れる。金や力によってはどうしようもない問題なのだ。困り果てた末にガイトンデはパリトッシュに打ち明ける。パリトッシュは，親の決めた相手と娘をすばやく結婚させる道を選ぶ。すると，娘は，意外にもおとなしく親のいう相手と結婚し平穏に暮らすかに見えた。しかしある日，宣言していた通り交通事故を装い車にはねられる。娘は両親に迷惑をかけない形で自分の意思を貫いたのである。（S.G. pp.251-262）ガイトンデはその娘の自分への信頼に答えられず，逆に娘を裏切ってしまった罪悪感にとらわれる。このエピソードは，カースト制度に代表される古き因習を保存する媒体としてのインドの大家族制度のしがらみが，個人の自由の枷となる現実と宗派やカーストの違いに捉われず人を個人として評価するガイトンデの近代的・世俗的意識を表している。

次に起きる事件は，ムンバイのヤクザ組織の中の本格的な抗争へのプレリュードとなる。そしてこの抗争の発端となる事件から明らかとなるのは，ヤクザ世界と警察との共栄的関係の隠された仕組みである。

ムスリムのドン，シュレイマン・イサとの「仁義なき戦い」

ある日，海上ルートでインドに密輸入しようとしていた積荷が，海岸で警察に摘発される。情報が警察に漏れていたのだ。そして摘発にかかわったのがパルルカの配下の警官たちであることを知ったガイトンデは，ムンバイで最強のギャング，シュレイマンを通じパルルカに漏れたと直感する。シュレイマンとパルルカの密接な関係を知っていたからである。ではどうしてシュレイマンは，ガイトンデの取引の情報を知ることになったのか？そこでガイトンデの情報

網が効果を発揮する。スレイマンの片腕と定評のある男と知り合いであることを最近娼婦に自慢した男がおり，この男は陸への荷あげ作業をこれまで引き受けて来た男で，問題の荷あげの前夜その娼婦と寝ていたのである。これでガイトンデは，その男から荷あげ情報がスレイマンの側近に流れ，スレイマンが警察のパルルカと組んでガイトンデの取引を摘発したと確信する。警察トップのパルルカとヤクザのボスのスレイマンは，そのようにしてそれぞれの世界で協力・共栄関係を取り結び，上り詰めてきたことはヤクザの世界では常識だったのである。ガイトンデは，この事件を，ムンバイの闇社会において彗星のごとく現れたガイトンデに対するスレイマンからの警告だと受け止める。（S.G. pp. 266-272）

こうしてボンベイのヤクザ世界の大物スレイマンと新進のガイトンデとの間の「仁義なき戦い」が始まる。そしてその闘いのなかで，ガイトンデの盟友パリトッシュの乗った車が襲われパリトッシュは殺される。パリトッシュの死を前にしてガイトンデはその死をどう受け止めるべきなのか心ひそかに悩むのだが，パリトッシュが死亡する前にしつこくガイトンデに結婚を迫っていたことに思い当り，その忠告を受け入れることによってパリトッシュの死を追悼する決意をし，スバードラ・デヴァルカ（Subhadra Devalekar）という女性と結婚するが，初夜以来，性的不能に陥る。（S.G. 278-282）

こうしたなかで起きるアヨーディア事件は，スレイマンとの抗争の性格を変え，ガイトンデ自身のアイデンティティにも大きな影響を与えることになる。

アヨーディア（Ayodyha）モスク破壊事件とムンバイの宗派暴動

新婚旅行でゴアの沖でヨットを楽しんでいたガイトンデは，それまで連日新聞で報道されていたBJPを中心とするヒンドゥー・ナショナリストによるモスク破壊がついに実行されたというニュースを知る。ムンバイの部下からの電話によると，ムンバイでもそれに呼応してヒンドゥー教徒とムスリムの間の暴動が起きているという。ガイトンデたちは急きょムンバイに戻ることにするのだが，それは暴動という社会的混乱・無法状態を利用したスレイマンによるガイトンデの組織への武装攻撃を恐れたからである。暴動という無法状態は暴動とは関係のない目的での攻撃への格好の隠れ蓑によく利用されるからだ。彼らがゴーパルパースに戻り，地元に残っていた部下に状況を聞くと，近くのムスリムからの報復攻撃を撃退したところだという。しかしガイトンデがゴーパルパースのムスリムの居住区のことを聞くと，みんな逃げてしまった，どこに行ったのかはわからない，そしてそこには他の人間がすでに住んでいる，という。そして他の人間のなかにはガイトンデの組織の人間も含まれるという。それを聞いていたガイトンデの側近の一人ムスリムのチョッタ（Chotta Badria）の表情がこわばるのにガイトンデは気づく。これまでチョッタは彼の組織の中で皆から尊敬され，彼がムスリムであることが問題になったことなどなかったのだ。しかし，住民がヒンドゥー教徒とイスラム教徒に別れ，殺

しあう状況のなかで，ヒンドゥー教徒が多数派であるガイトンデの手下のあいだでも反ムスリム感情が高まってきていたのである。チョッタの感情を気遣ったガイトンデは，若い者が言うことなど気にしないようにと励まし，家に帰す。そしてヒンドゥーの部下にはチョッタに手出しをするものがあれば自分が許さないといましめる。そしてゴーパルパースを見回るのだが，そこは，ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の血を血で洗う戦場と化しているのを目の当たりにする。（S.G. pp. 383-387）

他方，ガイトンデの新妻スバードラへのガイトンデの性的不能はよくならない。しかし，ある日ガイトンデは妻に，二人の結婚のお膳立てをした亡きパリトッシュについて聞かれ，二人の関係とパリトッシュの死について話すのだが，妻に，パリトッシュを殺した相手に復讐したのか，と聞かれ，ガイトンデは自分の性的不能の原因に思い当る。自分はパリトッシュを殺した相手への復讐を未だ果たしていないのだと。そして下手人への手掛かりをもとめてボンベイ中に指示をだす。ここからガイトンデの心のなかにも個人対個人の報復的復讐の論理が埋め込まれていることが分かる。（S.G. p. 389）

だが，アヨーディア事件以後のムンバイの宗派暴動の勃発では，個人対個人の論理を超えた宗派集団対宗派集団の対立の論理が前景化される。それに従って，彼の組織の多数派を占めるヒンドゥー教徒が，ボスのガイトンデの宗派闘争における立場の明確化を求めるようになる。

モスク破壊からしばらくし，再びヒンドゥーとムスリムとの間の宗派的殺戮がムンバイで勃発するのだが，ヒンドゥーとムスリムが毎日殺しあう状況のなか，右腕のバンティが，手下の統制に手を焼いているという。ヒンドゥーとムスリムの殺し合いが目の前で起きているなかで，彼らは何かしたいのだ，という。そして若い手下のなかには親分は俺たちの味方なのか，それともムスリムの味方なのか？と問いかけるもののでてきている，という。ガイトンデは，やつらの味方か，それとも俺の味方か，という宗派によって人間を敵と味方にわける発想を嫌い，そんなことをしても金儲けにはならない，と部下に言えとバンティにはいう。しかし，その問いかけは，殺戮が日常茶飯事として続くなかで，彼を悩ましつづける。そして俺はこれまで，モスクを攻撃しようという連中やそれを守ろうという連中をどちらも愚か者と見なしてきたが，そういうお前は何なのだ，という自分への問いかけへと転じる。他方，誰もが立場を鮮明にすることを求められている状況のなかで，何もせず，立場を明らかにしないガイトンデを軽蔑し，組織から離れてゆく部下もでてくるのである。焼かれた店や殺されて溝に横たわっている死体を見て怒りに駆られた彼らは，武器を持ち出し，ムスリムを見つけると車から引きずり出し，殺害し，女をレイプし，子供と一緒に石油をかけて焼き殺すのである。（S.G. pp. 390-391）

ここに見られるのは個人への恨みに基づく殺害ではなく，ただヒンドゥー教徒であるという理由だけでムスリムに殺された仲間への報復行為である。そうした現実のなかでガイトンデが，

宗派的暴力の応酬そのものを愚かだとして否定すればするほど今やヒンドゥー教徒の集団と化して行く彼の組織のボスとしての彼の立場を自ら掘り崩すことになる。

ビピンとの取引―ヒンドゥーのドンとしてのガイトンデ

そのようなときにヒンドゥー過激派のいまや州会議員のビピンがやってきてガイトンデに当座の救いの手をさしのべる。驚くべきことには，この州会議員の手には剣が握られていた。暴動による混乱に乗じ，その剣で一人のムスリムの首を落としてきたところだったのである。そして，お前はパリトッシュをムスリムのスレイマンに殺されたのに何もしないのか？と問いかける。ガイトンデは心のなかでは，スレイマンはムスリムだが沢山のヒンドゥーの手下をかかえている。そしてムンバイのムスリムを殺してもドバイに拠点を置くスレイマンの血が流れるわけでもない，と個の論理に基づく合理的思考を働かせる。だが，そうとはいわず，ただ，ムスリムを殺しても何の得にもならない，と資本主義的ビジネスの論理で答える。するとビピンは，実は，儲かる話がある，とガイトンデにも納得のできる論理に乗り換える。ビピンは，ある生命保険会社の裏側の土地を開発しようとして3年前に買っていたのだが，そこには，ムスリムの住民が昔から住んでいて立ち退きに応じない。スラムではあるが，そこには水道も電気も通っているからだ。そこでビピンはガイトンデを利用して住民を無理やり立ち退かせようと考えたのだ。ガイトンデにとっては金儲けになり，かつ部下にはガイトンデはムスリムと闘うヒンドゥー教徒の味方という打ち出しができるのである。ビピンは，今なら，暴動という無法状態を利用し，暴力的地上げをヒンドゥーによるムスリムへの攻撃という体裁で隠すことができる。しかし，そのうち軍隊も乗り出して取締にくる。そう，上の方でそうなっているのだ。だから今がチャンスなのだという。ガイトンデは，この名案に飛びつき，ムスリム住人のスラムを次の夜焼き払うのである。（S.G. pp.391-394）この行為によってガイトンデは手下からヒンドゥーのドンと呼ばれ，ムスリムのドンと呼ばれるスレイマンと対置されることになる。このようにして，ヤクザとしての金儲けのための行為が，宗派闘争という別の色で塗り固められるのだ。ガイトンデは，それが部下を統率するのに都合がいい限り誤解に便乗しようとする。ここにはプラグマチストとしての彼の性格がよくあらわれている。

この部分で重要なのは，宗派暴動を扇動するヒンドゥー・ナショナリストの隠された戦略である。政治家ビピンがヒンドゥーとムスリムの暴動に伴う無法状態にまぎれヤクザの力を利用し自分のビジネスに利用しているのである。何故重要なのかといえば，ビピンのここでの行動がヒンドゥー・ナショナリストの宗派的扇動活動の比ゆとしての意味を持っているからである。BJPやShiv Senaはアヨーディア事件で見たように，ヒンデゥーとしての意識を高揚させることによって，一面では，マンデラ報告実施問題でカースト間の分裂の危機にあるヒンデゥーとしての団結心を取り戻し，同時に闘争を煽り立てることによって選挙での票を大幅に増やし，

政権掌握後は，グローバリゼーションの流れに乗り，ビジネスの利益を図る政策を取るのである。その根底には実利実益を否定しないヒンドゥーの神々があるのかも知れない。

物語に戻れば，このムスリム住民への攻撃は，ガイトンデのアイデンティティに大きな変化を与えることになる。暴動が政府の力によって鎮圧されたある晩，ガイトンデは妻のスバードラから，若い手下たちが，ガイトンデをヒンドゥーのドンとして讃えているという話を耳にする。その瞬間，ガイトンデは，これまでの人生を振り返りながら，俺は強気で人を導いてきたが，ついてくる連中を実は軽蔑していた。何故なら自分の行動の奥に確固とした信念のようなものが欠けていたからだ。たとえ信念が欠けていても娼婦との官能の世界に浸ることはできる。だが結婚にはそれ以上のものが必要だ。何か信じるもの，個を超えた価値観，全体性が必要なのだ。だが，俺は，ムスリム住民を追い出し，ヒンドゥーのドンとして振る舞うことによって一つの集団の価値にコミットし部下の賞賛を得たのだ，と思う。そのような高揚感のなかでガイトンデは初めて妻と交わることができたのだ。そしてパリトッシュに対し，心のなかで，俺はお前のことを忘れているわけじゃない，俺はお前を殺した連中を見つけてやると決意する。（S.G. pp.395-396）

だが，ヒンドゥーのドンという新たに獲得したアイデンティティに本当に彼が納得していたのかどうか，疑問である。何故なら，今回のガイトンデのムスリム住民への攻撃は金儲けと部下の統率という極めて便宜的理由に基づいて行われたものであることを読者はすでに知っているからである。今回のムスリム住民への攻撃はガイトンデが直面していた問題の本質，すなわち彼には確固とした信念，個を超えた価値の欠如を克服するひとつの選択肢を与え，それが部下の統率と妻への性的不能という問題を乗り越える当面の手立てとなったという以上の意味はもっていないだろう。ガイトンデはそのような批判的・懐疑的理性を意識の奥底に邪魔者として押しのることができただけだったのだ。

チョッタの殺害

だが，次の物語の展開は，もう一歩，宗派対立のなかでのヒンデゥー的アイデンティティに彼を近づけて行く。それは，パトリッシュ殺害の下手人を発見したことである。

翌朝ドバイから届けられた一本のビデオによってパリトッシュをスレイマンに売った男が判明する。それは，ドバイに拠点を移しているスレイマンのパーティーをたまたま撮影したビデオに一瞬映っていた男であり，それはガイオンデの右腕チョッタの兄にあたるバーダだったのだ。そこからガイトンデの苦悩が始まる。自分に対するチョッタの友情や忠誠にもかかわらず，自分の兄をガイトンデに殺されたらチョッタはどう感じるだろうか，と後々のことを考えるのである。こうしてガイトンデはチョッタを生かしておくことはできないと悟る。たとえガイトンデにはそうするしかなかったということをチョッタが重々承知していたとしてもだ。そして

ガイトンデは，そもそも人生とはそのようなものだと感じる。つまり人生とは選択の連続であり，あるものを選ぶことによって，その代わりに何か大切なものを失うことなのだと。そして新しく獲得したヒンドゥーであるという選択は何千というムスリムを殺すということを意味するのだ。（S.G, pp. 396-404）

この最後の部分には，ガイトンデのなかで起きた論理の飛躍が隠されている。ガイトンデはこれまでのチョッタとの自分との関係に立って苦悩するのだが，チョッタ個人の立場に立って，個人的復讐の論理が自分と同じように働かざるを得ないことを知ると，自分個人を守るために，相手の殺害を決意するのだ。これが実相である。そしてそれをヒンドゥー教徒という立場からムスリムのチョッタを殺すのだと合理化しているのである。つまり宗派対立を隠れ蓑にして保身を合理化しているのである。このようにしてガイトンデはバーダの殺害を命じた後，同時に，チョッタも冷静に自分の手で殺すのである。こうしてガイトンデは生まれて初めて心穏やかとなる。悩みの種を一挙に解決し，また自分は部下が尊敬できる指導者なのだと思うのだ。しかしそれは本当の解決ではない。そのころから彼は腸の不調に悩まされ始める。そしてウイスキーしかそれを忘れさせてくれるものがないのだ。

ヤクザの抗争からムスリムとヒンドゥーの抗争へ

次の展開は，ムスリムによる報復的宗派暴力の国際的広がりのなかで，ガイトンデをさらにヒンドゥー教徒としてのアイデンティティに引き寄せてゆく。

チョッタ殺害からしばらくしてムンバイで大事件が起きる。爆弾がしかけられ手榴弾が投じられ沢山のひとがその犠牲者となる。そしてそれが先に起きたモスク破壊とムスリムの大量殺害への報復であることがテレビ報道によって明らかとなる。暴動のあとドバイを経由しパキスタンに逃げ場を求めた若いムスリムたちがそこでパキスタン政府によって訓練を受け時限爆弾を街の繁華街で爆発させたのである。そして密輸に手慣れたスレイマン・イサが，そのイスラム過激派の武器の運び屋を務めたのだ。（S.G. pp. 406-407）

ニュースを見ていたガイトンデは，次に俺は何をやるべきなのか？と自問する。この問いへの答えは直ぐに与えられる。今やマハラシュトラ州の Shiv Sena の指導者に上り詰めていたビピンが会いたいと言ってきたのだ。その時ガイトンデが紹介されたのがシャーマ（Sharma）である。ウットラ・プレディシュ州出身のブラーミンのこの男は，スレイマンを通じ武器をインド国内に送っているパキスタンに対抗するために，ガイトンデに武器の密輸を海上ルートで頼みたいというのだ。ガイトンデは，「俺は，あんた達の仲間だ」と即座に協力を約束する。（S.G. pp.pp.407-408）

こうしてガイトンデとスレイマンのムンバイでの組織間の抗争がインドのヒンドゥー・ナショナリストとパキスタンを背景とするムスリム過激派の抗争という国際的広がりを帯びるこ

とによって，ガイトンデのヒンドゥー意識もさらに一歩高まって行く。そして個人を超えたより高い価値を求めようとする意識がそれを支えているのである。

逮捕されるガイトンデ

しかしガイトンデは警察に逮捕される。80年代にテロ活動に対処するために作られたタダ（TADA）法を適用されたのである。自分を逮捕に来た警官がパルルカの部下であることからガイトンデはこれがスレイマンとつるんでいるムンバイ警察の高官パルルカの差し金であることを見抜く。だが逮捕に来た警官は，パルルカが現在州政権の座にある国民会議派と関係が深いが，次の州議会選挙（1995年の選挙のことであろう）ではShiv SenaとBJPによる政権が出来る可能性を見越しSenaとの繋がりが深いガイトンデには丁重に振舞う。（S.G. pp.450-451）

逮捕されたガイトンデはスレイマンと深い関係にあるパルルカの厳しい尋問にさらされつつ自分が関わることを選んだより大きな闘い，即ちシャーマの依頼に答え武器を密輸する仕事は一体どういう目的の為なのか，それは何時終わるのか，そして，一体何故？という疑問を抱くようになる。（S.G. pp. 452-455）

警察署内部での尋問が終わった後ガイアトンデは刑務所におくられるのだが，そこにはすでに逮捕されている多くの部下がいて一種の共同生活がはじまる。ガイトンデの自殺に通じる重要な展開が始まるのは，この刑務所暮らしの時期である。ガイトンデは，密かに携帯電話を入手し，それを通じてムンバイでのビジネスの指揮を刑務所内から始める。次には，同じ刑務所に収容されているスレイマンの部下たちを裁判所へゆくバスのなかで襲い，勝利し，受刑者の間での主導権を取る。次には，部下たちの刑務所内での暮らしを改善するために刑務所長を籠絡する。テレビや映画に出ている女優に会いたいという願望をかなえることによってである。ジョジョというテレビやエンターテイメントの世界で幅広い人脈をもち高級娼婦を斡旋するビジネスを手がけている女性との関係が始まるのはこれを切掛けにしてのことであり，彼女を気に入ったガイトンデは毎日のように電話で話をするようになる。（S.G. pp457-486）

ガイトンデの釈放と家族の死

そうこうするうち，裁判が開かれガイトンデはムンバイから出ないという条件で釈放される。久しぶりに妻と生まれたばかりの子供と再会したガイトンデであったが，ある晩，警官を装ったスレイマンの部下に襲われ命からがら逃れるのだが，そのなかで妻と子供を失い，意図的にムンバイの外にでることによってまた安全な刑務所に舞い戻ることにする。（S.G. pp.487-490 ）

刑務所内でのグールーとの出会い

ガイトンデの核シェルターのなかでの自殺という謎の解明に繋がる二つの大きな出来事が起きるのは，この二度目の刑務所暮らしの間である。一つはヒンドゥー過激派とのかかわりが新たな段階を迎える。これまでガイトンデはシャーマの依頼で，パキスタンの諜報機関 ISI によるインドでのテロ活動支援に対抗するため，海上ルートを通じてインドのヒンドゥー過激派に武器の密輸を行ってきた。しかし，それまで円滑に行なわれていた取引に陰りが見える。部下のブンティによると，シャーマからの支払いが滞りがちになったというのである。そこでガイトンデは，ブンティに命じシャーマに資金を調達している黒幕の正体を洗い出させる。その結果浮かび上がってきたのは，テレビにもよく出ている有名なヒンドゥー教のグールー，シュリダー・シュクラ（Shridhar Shukla）であった。その知らせをきいたガイトンデはその大物と直接談判したいという。すると，その直後その当のグルーが直接彼の携帯に電話をしてくるのである。その声を聞いたとたんガイトンデは引きこまれる。その話方に抗い難い力と魅力を感じたからである。グールーは，私はお前が私のことを探しだすのを待っていたのだが，今やお前はその準備ができたようだ。お前はじき刑務所からでることになるだろうからその時に面と向かって話をしようといい，電話を切る。その日，ガイトンデはテレビで講演をするグールーの話に聞き入る。（S.G. pp. 490-503）

クマール氏との出会い

他方，もう一つの重要なアプローチがガイトンデになされる。ある日，ガイトンデは刑務所の所長から緊急の呼び出しを受け署長室に向かう。そこで紹介されたのがクマール氏（Mr. Kumar）である。クマール氏は，政府のある機関に属し中央政府のために働いていて，ガイトンデとスレイマンの抗争を調べてきたという。そしてパキスタンの為に武器を輸入しているスレイマンに対抗し，インドに武器を輸入しているガイトンデの活動に感謝している，という。ガイトンデが，スレイマンは売国奴だ，と答えると，クーマは，君は愛国者か？と質問する。ガイトンデはためらうことなく，そうだ，と答える。その瞬間，ガイトンデは，愛国者としての自分のアイデンティティを肯定する。ガイトンデは，自分はこれまで何も知らずにひたすら金や名声や贅沢のことしか考えてこなかったが，今では人間はだれも一人では生きてゆけないことを知っている，と思うのである。そして自分の目の前にいるこのクマール氏も愛国者の一人なのだと感じる。そして，何をすればいいのか，と尋ねる。この質問に対するクマール氏の答えは意外なものであった。インドから離れ海外に活動の拠点を移すことを勧めたのだ。というのもインドに彼がいる限り敵に襲われる危険があり，かつタダ法は今では無効になっているが，いつガイトンデを逮捕するために法律が作られるかも知れないからだと，というのだ。そして海外の拠点作りのために必要な資金を保証すると申し出る。ガイトンデは，では何をすれ

ばいいのか？と再び尋ねる。クマール氏は，反インド的なテロ活動や動きについて知らせて欲しい，そのために我々はあらゆる類の仕事をしている人々の協力を必要としているのだという。それを聞きながら，ガイトンデは，彼らは自分たちが合法的にはできないような汚い仕事をしている人間，公的には関係を認めることができないような自分のような人間の協力を必要としているのだ，と心のなかで思う。ガイトンデは，自分がバカではないことをクマール氏に知らせておきたい衝動にかられ，クマール氏がロー（RAW）の諜報部員であることを自分は知っていることを示す。ローは 1968 年に創設された諜報機関であり，中印戦争やインドーパキスタン戦争でのインドの諜報活動の失敗の教訓から，政府から独立した機関としてテロ活動を始めとする反インド的活動についての独自の情報収集を行い，政府に知らせる機関である。[42] そして，ガイトンデは，愛国者としての自分の新たなアイデンティティに納得し，協力する気持ちになる。（S.G. pp503-505）

ここで，ここに登場する RAW の諜報部員については最初の「挿入章」のなかでその背景が詳しく明らかにされている。（S.G. pp. 306-346）　クマール氏は本名を K.D. ヤダフ（Yadav）といい，学業とスポーツの両面において優れていたため，RAW の前身である Intelligence Bureau 員に 1963 年春に選抜され，国家の為に働くことを決意したのである。Yadav というのは，指定カースト（不可触民）や指定部族以外の後進カースト（OBC）の一つである。RAW 設立の最初の会議の折，挨拶に立ったネルー首相は，会場を去るとき，K.D. だけに小声で「がんばるんだぞ」と声をかけたのだ。それはブラーミンが多くを占める諜報部のなかで後進カーストとしての彼への励ましであったのだろう。事実，諜報部の中のカーストの違いは微妙な形でつきまとい，口には出さないものの，彼はヤダフであることの誇りで自分を支えてきたのである。諜報部員としての彼は訓練の後，インドの果て，辺境の中印国境の情勢視察，中国の毛沢東の影響を強く受けたナクサライト運動のテロリストやケララでの毛沢東派の極左主義者との闘い，そしてパンジャブでのシーク教徒の過激派によるカリスタン分離・独立運動から生まれたテロリストの組織と，それを背後から資金援助するパキスタンの諜報部との闘いに関わってきた。ヤダフには，マスー（Mathur）という諜報部同期の親友がいた。マスーはブラーミンであったが，カーストにこだわりなくヤダフに近づいてきたため親友となったのだ。そのマスーは，シークのテロリストに正体を隠して近づき，彼らの活動に関する情報収集を行っていたのだが，それはシークのテロリスト組織を背後から操り，援助するパキスタンの諜報部 ISI をも敵にまわすことを意味した。ある日，近づきになったテロリストと会う約束の日以来，マスーは消息不明となったのである。そしてそのマスーの娘が実は諜報部員として物語の冒頭にサルタージの前に表れたアンジャリだったのである。父の後を継いで諜報員に志望したアンジャリを，今や教官となっていたK.D. ヤダフは教えたことがあるのだ。K.D. の引退後，アンジャリは諜報部員としての才能を発揮し，ガイトンデ担当役を申し出たのだが，女性にはヤクザの

親分を扱うことはできないという男社会の論理で彼女の申し入れは実現せず，ガイトンデの死後，彼女がこの件を扱うことになったのだ。（S.G. pp. 306-336）

ガイトンデの活動の謎の深まり

他方，生前のガイトンデの動きについて調査している警察官サルタージと諜報部の動きを語る流れからは次々と驚くべき事実が明らかになって行き，ガイトンデが関わった事柄の重大さと歴史的深みが側面から次第に明らかにされて行く。

第一に，サルタージは，諜報部員アンジェリからガイトンデが最後にムンバイで籠っていたのは実は，核シェルターであったという事実を知る。そして何故そのような必要があったのかが問題となる。また，諜報部は，クマール氏を通じガイトンデと接触があったが，ある時期から急に連絡が途絶え，そして突然ガイトンデはムンバイに表れたというのである。

第二に，ガイトンデが籠っていた核シェルターのなかで死んでいるのを発見されたジョジョについて調査したサルタージは，ジョジョの部屋で大量の紙幣を発見していた。そしてその紙幣は，アンジャリによると偽物で，パキスタンで印刷されたものであったという。そして，そのような偽札が過去７～８年に渡ってパキスタンのインド内部での活動を支えるためにインド中に広く流布していたという。だが，この紙幣に使われているインクと紙は最新のもので，唯一これまで発見されているのは，インドへの武器密輸が発覚した際，警察が押収したものである。その事件とは，走行中に事故を起こしたトラックから大量の武器が発見され，その送り手を遡ってみるとデリーのある家につながり，その家を捜索すると大量の武器とその紙幣が見つかったというものである。そしてその武器の最初の送り手がムンバイのガイトンデだったのである。

第三に，デリーで逮捕された連中は，カルキ・セナ（Kalki Sena）という地下組織で，発見されたパンフレットによると戦争の準備をしているという。仮想敵はムスリム，共産主義者，キリスト教徒，シーク教徒，戦闘的なダリッツ（かつての不可触民）などであり，戦争の後には理想的なヒンドゥーの国が建設できるという思想がうかがえるというのである。（S.G. pp.507-509）

このようなインド諜報部による情報が読者に提供される一方，ガイトンデの物語も新段階を迎える。ガイトンデは，クマール氏の指示通り活動の拠点をタイやインドネシア沖のヨット上に置き，衛星携帯を通じムンバイの側近に指示を与えながらビジネスをこなす。そして毎日のようにジョジョと電話で話す関係となってゆく。他方，グールーやクマール氏との世界も継続する。そしてガイトンデはそれら三つの世界を完全に別々に同時進行させ，交わらないようにしたのである。（S.G. p.569）

他方，インド諜報部のクマール氏は，カシミールで反ヒンドゥーを鮮明にして闘うイスラム

教の説教師で，今や政治家に転身し，元電気技師という経歴を生かしイギリスでの政治家としての認知と資金の獲得を目指すメムード・グース（Mehmood Ghouse）をロンドンで暗殺するようガイトンデに依頼しガイトンデはそれを引き受ける。ガイトンデは，それをクマール氏の自分への信頼の証と受け止め，綿密に計画を練る。（S. G. p.571-572）

グールーとの関係の深化

他方，ガイトンデはいつしかグールーの熱心な弟子となっていた。それまで宗教に関心をもたず，人に心を許さなかったガイトンデが今ではグールーの日々の動向や講話をウエッブサイトで追い,熱心に読み耽るのである。どのようにしてそのようなことが起こり得たのだろうか？

グールーは，ガイトンデが刑務所からでて10日後に再び電話をしてくる。この国際的に著名で大統領や首相との昼食にも招かれる大物からの電話にガイトンデは自尊心をくすぐられる一方で，何らかの下心を持ってのことだろうと思い，何をして欲しいのか尋ねる。

すると，ただガイトンデと話がしたいのだという。そこでガイトンデは，兼ねてより抱いていた疑問，すなわち，宗教家でありながら暴力を肯定し，自分に武器を密輸させるのは何故か？と問う。宗教家が普通平和について語っても暴力を肯定したりはしないからだ。それに対しグールーは，この世の成り立ちを大きな観点から考えて見たらいい。たとえば，生命。そこに暴力は含まれていないだろうか？命は命を奪うことによって成立しているじゃないか。全ての存在のエネルギーの源である太陽自身が平和な場所ではない，爆発を繰り返している。ガイトンデは，それと人間が人為的に振るう暴力とは違う，と反論する。グールーは，では暴力なしに平和をもたらすことはできるか？と問いかける。ガイトンデは自らの経験で，平和は暴力なしには実現しないと思っている。だがガイトンデは，グールーは聖人とされていて，聖人は闘いを抑えるのが普通ではないか？と言う。するとグールーは，インドの歴史を見るがいい，聖人はかつて戦わなかっただろうか？と言い，『ラーマーヤナ』のなかで最も完全な人間とされるラマは，弓をもって不利な状況のなかで戦わなかっただろうか？『マハーバーラタ』のなかで，戦いを前にして親族を殺すことにとまどいを覚える無敵の戦士アルジュナにクリシュナは，正義と道義的責任を果たす為にはたとえ親族であろうと殺すことは他の課題に勝るのだ，と言わなかっただろうか？とインドのヒンドゥー教の二代叙事詩やイギリス植民地支配への戦いに立ち上がったヒンドゥーの僧侶サドゥーの歴史を想起させる。すでに述べたように，インドではテレビでインドが世界に誇る二代叙事詩の連続テレビ番組が80年代の末から90年代にかけて大々的に放送され，国民的な関心を得ていて，刑務所のなかでも見ることができたのである。そしてそのような伝統的権威を根拠にするグールーの言葉にはガイトンデも異論をはさめない。さらにグールーは，我々は平和を守るために，いつ闘わねばならないのかを知らねばならぬ。そのためには強い信仰が必要だ。インドの何千年に渡る歴史はそのような例に満ちている。

もし私が聖人であるならお前もまた，そのような聖人なのだ，という。ガイトンデは，このようなグールーとのやり取りに疲れ果て，その晩，幼い時のヒンドゥーのお祭りのときにみた戦うナガ・サドゥ（naga sadhus）の姿を夢に見，聖人とは何か？道義ある生き方とは何か，という問いに悩まされる。（S.G. pp. 575-577）

神の存在について

次の電話での議論のテーマは神の存在である。ガイトンデは，神などという存在を自分は信じていない，宗教は政治家が選挙民を騙す道具で，信仰を持たない連中が無知な民を騙すためのものだ，という。グールーはそれには反論せず，世界の対称性についてどう思うと意表をついた議論を展開する。グールーが言っているのは，火と水，襲うものと襲われるもの，愛と憎しみと言ったように，この世のすべてのものが対になっており，相互に対立・衝突していることであり，それはガイトンデもすでに経験的思索のなかで知っていたことである。すなわち，ヤクザの世界にもガイトンデとスレイマンの対立が存在し，ヒンドゥーのドンというアイデンティーを受け入れることは，ムスリムを否定することであった。それをさらに高い所から見ると，世界には秩序が存在する，太陽が草を育て，草が他のものを守り育てる。その美しさがわかるか？とグールーはいう。そししてヨガを通じ，精神を集中し，目の前の現象を見つめ，そしてその奥にあるものを見つめるのだ，そして今度会ったとき何をガイトンデが見たか，話してくれという。ガイトンデは，この日も疲労困憊するが，グールーは自分のなかに何かを植え付けたと感じる。そしてその日から周りの何気ない事物の間に存在する繋がりや対関係に注目し，テレビの番組を見て猿から人間への進化，そしてその人間が月や星に向かおうとしていることに気づく。そこには方向性があり，上に向かっての動きがある。そしてガイトンデは，そのような自然の秩序に対して自分の人生はどうなのかと自問する。自分の人生は偶然に支配される無意味なものなのか？無意味な人生という考えをガイトンデは受け入れることができない。自分の人生には貧困と孤独から出発し，闘い，勝利し，上昇し，家庭を持ち，周りの人間から愛され，そしていまだに向上を求め努力している。そして国から与えられた任務をもち，自分を導く人を得ている，俺の人生にはストーリーがあるのだ，と考えるのだ。ガイトンデは，次にグールーから電話があった時，そのような考えをグールーに伝える。グールーは，ガイトンデを褒め，そのような宇宙の関連性の網の目を見て，それを作りだしたものの存在を否定できようか？と問いかける。ガイトンデは，この議論が神など存在しないと自分が言い出したことから始まったことを思い出す。ガイトンデは，それは神なのか？というと，いや，意識なのだ，とヒンドゥー教のアートマンの理論で答える。アートマンとは自我の根元にある意識であり，それは宇宙の原理や法則性と一致しているとされるのだ。（G.G. pp.577-580）

そしてグールーがガイトンデのタイ人との取引について，相手の裏切りを預言し，実際その

よう事態が起きた時，ガイトンデは，未来を予言することなどできないはずだ，と過去，現在，未来についての直線的な時間の流れという観念によって否定しようとする。それに対しグールーは，アインシュタインの相対性理論を持ち出し既存の時間の観念を打ち壊す。ガイトンデは，その理論こそ理解できなかったものの，我々が目や感覚で捉えた世界が実は夢であったり，実体とは必ずしもいえないことや，未来を予知する能力を持って生まれた人も世の中にはいることも納得する。グールーは，自分にはささやかな予知能力しかなく，間違うこともある。だから私の言うことを鵜呑みにせず事実によって検証することが必要だと，という。ガイトンデは，それ以後の密輸取引がほぼグールーの言う通りに進んで行くことを検証しつつ，グールーへの信頼を深めてゆく。（S.G. pp. 580-582）

ガイトンデにとってのグールーの意味の変化

　これまでのガイトンデとグールーのやり取りは，ガイトンデがグールーに向けた懐疑を軸に展開されていたのだが，一旦ガイトンデがグールーを信じるようになると，ガイトンデの関心は，グールーが自分に向けた眼差しに移る。ガイトンデは，グールーが自分以上に自分の事を理解し見抜き自分の過去や未来を知っていて，それでいて非難がましくはないことに気づく。高邁な精神を持つグールーが，卑俗な欲望の世界でのたうちまわり，犯罪行為を生業にしているガイトンデのような人間を決して見下さないことを素晴らしいとおもったのだ。ガイトンデはグールーに自分のような人間にどうしてもっと真っ当な道を歩ませようとしないのか，と尋ねた時，グールーは，トラはトラであってこそ素晴らしいのであって，羊になろうとすることほど忌まわしいことはない，この終末期には，救いに至る明確な道などはないのだ，とガイトンデのような仕事の必要性を暗に肯定する。私は禁欲生活にはまだ向かないのでしょうかという問に対し，『マーハバーラタ』の戦士アルジュナになぞらえ，お前は私の戦士だ，そしてその素晴らしい戦う才能を生かすためにも，もう一つの性質を無理に押さえつけてはいけないのだ，という。こうしてグールーはありのままのガイトンデを肯定する。さらにグールーはガイトンデが入れ込もうとしている女優の卵についての占いの頼みについても多忙な中相談に乗ってくれ，グールーは自分のことを気にかけ構ってくれると感じるのである。（S.G. pp. 580-583）

　次に起きた事件はガイトンデのグールーへのコミットメントを更に深めることになる。ある日，グールーはガイトンデに直接会いたいという。これまでは入門的な教えであったが，会うことによってさらに高いレベルにガイトンデを導きたいというのである。グールーは，次の週からムンバイに滞在し，その後シンガポールに行くのでそこで会おうというのだ。それを聞いて胸を躍らせたガイトンデはその予定を早め，二年ぶりにムンバイに戻ることにする。グールーはヒンドゥー教の犠牲祭の儀式を10日間に渡り行い，ガイトンデは一般の信者にまぎれその儀式に参加し，神が自分の身の個々の部分を切ることによってこの世の様々な事物が存在する

ようになったというヒンドゥーの創世と犠牲についての教を聞く。そしてその最後にグールーとの会見を申し入れたのである。（その犠牲の儀式のなかでガイトンデが出会ったのが会場の整理にあたっていたサルタージだったのだ。ガイトンデはサルタージの鋭いが，人間味のある人柄に好感を持ったのである。後にガイトンデが核シェルターに居ると知らせたのはガイトンデ自身であって，このときに会ったサルタージに好感を持ったのが原因だったことが判明する）。（S.G. pp. 585-599）

グールーはガイトンデがこの儀式に参加したことを喜び温かく迎える。そして去ろうとするガイトンデに，ひとつお前に聞きたいことがある，お前の父親に何があったのだ，と問いかける。その一言はガイトンデの心の奥底の地獄の炎を吹き出させることになる。それはこれまで心の奥底に追いやり，硬く扉を閉ざし誰に対しても語ることを拒否してきた問題であった。ガイトンデは，この目の前にいる男は自分の硬い殻に覆われた場所の存在にどうして気付いたのだろうかと驚き，もはやこれまでの自分を守ることはできない，と思う。するとグールーは，彼の肩に手を置き，私には一筋の血が壁を伝って流れ落ちるのが見える，と言う。それを聞いてガイトンデは，グールーは知っているのだ！と感じ，思わず泣き崩れる。グールーは，私には，それしか見えない，何が起こったのだ？と問いかける。そこでガイトンデは父と母の物語を語り始める。（G.G. pp. 600-601）

ガイトンデの父親はラガベンドラ･ガイトンデ（Raghavendra Gaitonde）といい貧しいブラーミンの息子だったが，美しいと評判のスマンガラ（Sumangala）と結婚する。ラガベンドラは司祭の職で生計を立てようとしたが，若く，能力もなかったので従兄のスリアカント（Suryakant）の世話になる。スリアカントは，土地持ちで，土建業を営み，地域の会議派組織の書記でもあり，国のための工事を請け負った利益で寺を寄進し，ラガベンドラも司祭となることができたのだ。地域の発展で寺への寄付も増え，ラガベンドラ夫婦の生活も安定するようになる。そして生まれたのがガイトンデであった。本名はキランと言い，利発でエネルギッシュな子供でじきに読み書きも覚えたのだが，物心つき始めた頃には世間が父親を見る目を意識するようになる。父親が性格的にも肉体的にも貧弱で能力がなく信者からバカにされているのを感じ取り，内向的で周りの視線を気にする子供として育っていく。クンブ･メーラ（Kumbh Mela）（無数の信者が聖なるガンジス川に6年毎に集うヒンドゥー教のお祭り）が久しぶりに地元で行われることになり，キランは母親とともにスリアカントに連れられて行くのだが，スリアカントの気前の良さや肉体的逞しさと比較した自分の父親の貧相さを強く意識することになる。ある日，家に帰ると人だかりがしていて，家の壁に血がしたたっているのを見，制止を振り切って階段を登り屋上で見たのは後頭部を打ち砕かれたスリアカントの姿だった。自分の美しい妻が，スリアカントと密通している現場を見たガイトンデの父親がスリアカントを背後から襲い，姿を消してしまったのだ。そして残された妻は周りの男たちに身を売り，生活を立

てるようになり，村八分となる。ガイトンデは周りの子供のいじめと毎日のごとく戦わねばならず，やがてナイフを持ち歩くようになる。そしてある日，ボンベイ行きの汽車に乗客にまぎれて乗りこんだのである。（S.G. pp. 601-604）

こうしてガイトンデは，人殺しのふがいない父親と不実な母親という幼心に刻まれた屈辱感を心の奥底に押し隠し，生きてきたのである。そしてその秘密を覚られ，打ち明けることによって，そこまで自分を理解ししてくれるグールーに一層深く惹かれてゆくのである。

クーマ氏の引退

ヨットに戻ったガイトンデは計画通り，ロンドンを訪れたパキスタンの宗教指導者で政治家のメフードの殺害を巧みに成功させる。そして，その事件はBBC等を通じ広く世界に報道され論評の対象となり，イスラエルによる犯行説等が流れる。だがだれも本当のことはわからないのである。（S.G. pp.605-608）そしてその後，クーマ氏はガイトンデに自分の引退を告げ，後任者のクルカーニ（Dinesh Kulkarni or Mr. Joshi）を紹介し，ほどなく脳腫瘍に倒れ，病院でその生涯を遂げる。（S.G. pp. 672-67）

グールーの伝記的事実

他方，ガイトンデは，グールーについての伝記的事実をここで紹介する。グールーはパンジャブ州出身で，空軍の技術者の息子として生まれ，クリケット選手として将来国を背負って立つことを嘱望されるスポーツマンであったが，バイク事故で車椅子生活を送るようになる。事故に入院中に過去と未来を見通す力を表し，急速にヒンデゥー教の哲学者や僧侶との交友を深める。その半面，科学・技術の新しい発見に深い興味を示す。ムスリム教徒への感情的な嫌悪はないが，ムスリム過激派の世界支配的傾向は危険であり，彼らの活動に対抗して武器を輸入しておくことが大切だというのである。そしてまたグールーは慈善団体や大学をいくつも設立していた。（S.G. pp.608-611）このような活動はサイ・ババ（Sathya Saibaba）を想起させるが，伝記的事実の細部まで比較すると明らかに別人物として設定していることがわかる。[43)]

グールーの終末論的世界観

そして2001年のニューヨークの世界貿易センタービルへのテロ攻撃が勃発する。それをヨット上のテレビで見ていたガイトンデはただちにグールーに電話し，グールーがこの事件をどのように捉えているのかを聞こうとする。ガイトンデの頭のなかにあったのは，グールーがそれまでも語ってきたこの世の始まりと終わりについての説経である。グールーは言う。世界は生まれ変わるためには終わらねばならない。この世の葛藤が高まり，やがて爆発し，この世には何もなくなる。だがそれを恐れることはない，小さな我に捉われているから恐ろしいのだ。よ

り大きな観点から見れば何も恐れることはない，という。しかし，ガイトンデにはその意味がわからない。（S.G. pp.702-704）

「挿入章」の意味―ヒンドゥ・コミュナリストの陰謀

作者は次の「挿入章－時間の流れに散りばめられた5つの断片」で，ガイトンデの物語の背景にある，独立以来のインドとパキスタン相互の政治・宗教的対立と闘争にからむ諜報・謀略活動を描き，ガイトンデの物語をそのようなコンテキストのなかに位置づける。

その一つは，ヒンドゥー過激派の謀略である。ビピン，シャーマ，そしてグールーとつながる武器密輸活動の背後にあるのはヒンドゥー過激派の謀略なのだ。ガイトンデに武器の密輸を持ちかけたデリーの政治家シャーマの本名はトリヴェリ（Triveli）といい，ヒンドゥー過激派に属し，グールーの熱烈な弟子だったのだ。グールーは，イスラムの過激派との闘いのなかで，架空のイスラム過激派組織をでっち上げ，その組織によるインド攻撃を行わせ，インドとパキスタンの間の戦争を挑発しようとしていたのである。そして，「最後の日の戦士」という意味をもつヒズブディーン（Hizbuddeen）という組織の名前を思いついたのは，他ならぬトリヴェリだった。そのような計画のなかでトリベリに与えられた任務は，独立以来，インド内の過激派テロ組織へ資金援助を行ってきたパキスタンの諜報機関ISIから「ヒズブディーン」への資金を獲得し，武器をインドに密輸入し，破壊活動に使用し，インド軍のパキスタンへの報復攻撃・戦争を挑発しようとしていたのである。つまりはヒンドゥーとムスリム（パキスタン）の対立を煽るのが目的なのである。トリヴェリは，グールーのその計画のために，ロンドンのパキスタン大使館の一等書記官シャヒード・カーン（Shahid Khan）と様々な協力者を仲介して接触し，彼を通じビズブディーンへの資金を集めていたのである。そして，シャヒードという人物は，実はISIの職員だったのだ。（S.G. pp.705-708）

偽造紙幣の秘密―パキスタンの諜報部のインド内部のテロリスト集団への援助

もう一つは，パキスタンの諜報部の動きを，シャヒードの過去についても触れながら明らかにすることである。シャヒードは，70年代から80年代にかけて，インドのパンジャブを拠点に，インドから分離･独立し，シーク教徒だけの国家の建設を主張するカリスタン運動（Khalistan movement）の一翼を担う軍事組織（Khalistan Tiger Forces）を諜報員として支援してきたが，その運動はインドによって徹底的に弾圧され，その夜も，かつて一度会ったことのある「トラの軍団」の指揮者が殺害されたという知らせを受け取り，運動の敗北をかみしめていたのだ。だが敗北続きの活動のなかで，唯一胸を張ることができるのがインド紙幣の偽造であった。ガイトンデのムンバイでの自殺の謎を調査しているRAWの諜報員アンジェイによると，サルタージがジョジョのアパートで発見した大量の紙幣は，パキスタンか過去8年から10年のあいだ

工作のために使用した偽物の最新版だったという。そして，その偽造紙幣にかかわっていたのがシャヒードだったのである。（S.G. pp. 715-718）では，どのようにして，パキスタンは偽造インド紙幣を作ったのか，そして，それが何故，ジョジョのアパートに残されていたのか？

その事情はこうだ。インド政府は自国の高額紙幣を，友好関係にあったソビエト政府のウクライナ造幣局で印刷していたのだが，ソビエト崩壊後インドとパキスタンの諜報部が造幣局に残っていた紙幣の原版を巡って争ったのだ。その結果，インド側が原版を確保するが，パキスタン側は，ウクライナの倉庫に残されていた大量のインド紙幣の印刷用紙を手に入れ，精巧な偽札を発行し，インドでの工作活動に使用してきたのである。そして当時，パキスタンの諜報部でその責任者であった人物が，今はロンドンのパキスタン大使館の一等書記官シャヒードであったのだ。ジョジョが持っていた紙幣はジョジョがガイトンデやその部下に斡旋した娼婦への代金としてガイトンデが支払ったものであり，ガイトンデはその紙幣を密輸した武器の代金としてシャーマ（トリヴェリ）から受け取ったのである。そしてシャーマは，間に何人かの人を置く形で，パキスタン大使館一等書記官シャヒードからヒズブディーンへの資金援助という形で手に入れていたのである。（S.G. pp. 345-346）

こうしてガイトンデは，一方ではパキスタンに支援されたインドのイスラム過激派の反インド的活動に関する情報を RAW から求められ，他方，グールー，すなわちヒンドゥー過激派からは，スレイマンを通じたインドのイスラム過激派への武器密輸に対抗するという名目で，何かを密輸する仕事に利用されていたのである。一方は愛国的目的，他方はヒンドゥー的価値への貢献という大義名分を掲げていたのであるが，ガイトンデはそれが次に見るように，相互に対立するものだとは気づかなかったのである。

インド政府による武器密輸の摘発とグールーによる最後の指示

ガイトンデは顔の整形をし，それを彼がパトロンとなっている新進女優ゾイヤ（Zoya Mirza）に見せるためにロスまで行くが，緊急事態が起き，彼はプーケット沖のヨットに呼び戻される。グールーのために行っている武器の密輸がインド政府によって摘発され，クーマ氏の後任のクルカーニが怒っているのである。そして特定の集団のためにこれを行っているのではないか，と厳しく電話で追及されるのだ。（S.G. pp. 727-729）

この事件を受けてガイトンデは再びグールーに会いにミュンヘンに行く。ミュンヘンでグールーが行う儀式は，先のムンバイでの儀式のミニチュア版であったが，グールーが語る説教は，彼が起こそうとしている事件の前触れのようである。信者たちに語ったのは，激動の時代の訪れである。それは次第に高まりやがて爆発するのだが，そのあとには黄金の時代がやってくるという終末論的世界観である。ガイトンデはその説教の最後でグールーが述べた「理性の罠」に注目する。グールーは，心によって聞け，理性は叡智の妨げとなる，と理性を批判する。そ

の論理はこうだ。理性は日常生活の道具としては有効だが，究極のリアリティを把握することはできない。理性や普通の人間の理解を超えた真のリアリティとは狂人の幻覚なのだ，という。そしてそのような理性を支えるエゴを吹き飛ばし，それを超えたところにあるリアリティに近づくのだ，という。多くの信者たちにまぎれてその話を聞いていたガイトンデは最後にグールーと面と向かって話す機会を得る。

グールーは整形のため人相の変わったガイトンデに最初とまどうが，すぐにガイトンデとわかり，彼の名前を呼ぶ。それにガイトンデは深い感動を覚える。ガイトンデの心の奥底には，権力，金，女を得たいと言った表層の欲望よりさらに深いところに存在する憧憬，幼子のように名を与えられ，その名で呼ばれたい，という欲望があり，グールーはそれを充たしたのである。実の父と母を屈辱感のなかで拒否したガイトンデにとってグールーは，幼子に対する親のような存在と成ったことが解る。

グールーは，ガイトンデを，『マハラバーラタ』の英雄的戦士アルジュナになぞらえてアージュン（Arjun）と名付け，弟子たちに紹介する。ガイトンデは，今回の事件について報告し，武器が摘発された背後に，高度な情報を得たスレイマンが居るかもしれないという。グールーは一日だけ考える時間をくれという。（S.G. pp. 730-735）

次の日の朝，グールーは弟子たちとともに朝のお祈りをしている。そしてガイトンデに，その儀式の意味について語る。それは，この世に変化をもたらすためのものだという。宇宙とは意識そのものであり，それ自体エネルギーからなる物質世界に働きかけることができる。そして彼らの集団の祈りは世界を変えるためのものなのだ，という。

ガイトンデはグールーに武器が摘発されたことを報告し，今後の指示を仰ぐ。グールーはこれまで準備してきた計画の遂行のためにはもう一度だけ取引を行う必要があるといい，ガイトンデはそれを引き受ける。（S.G. pp.736-744）

これ以後，物語は多方面で急展開を遂げる。その後シンガポールに向かったガイトンデは正体不明の集団に襲われ，彼の部下はその家族を含め皆殺しに会う。他方，ムンバイの部下も同じ集団に襲われ大きな人的被害をこうむる。ガイトンデは，それが，それまで自分を利用してきたインド諜報部の仕業だと直感する。諜報部のクルカーニはガイトンデが自分の統制のおよばない危険な取引にかかわっていることを察知し，ガイトンデを抹殺することを選んだのであろう。（S.G. pp. 744-756）

他方，グールーの指示で最後の取引にかかわった二人の運び屋の死が伝えられる。医師によると被爆によるものだという。驚いたガイトンデはグールーに事情を聞こうとするがこの時点からグールーは弟子の僧侶たちとともに姿を消し，連絡が取れなくなる。事ここに至ってガイトンデは自分が利用されていたことと，グールーが彼らに最後に運ばせたものが核物質であることに思い至りパニックに陥る。ガイトンデはグールーの意図を正確には理解できないものの，

グールーが繰り返し語ってきた終末論的ビジョンとイスラム教徒への考え，自分が運ぶのを手助けさせられた核物質のことを結び付けインドとパキスタンとの全面戦争を引き起こすめためにムンバイで核を爆発させるのではないかと激しい不安に駆られる。その時，ガイトンデの心に浮かんだのは，彼に残された唯一の信頼できると感じた女性，ジョジョのことであった。他方，ガイトンデは，混乱した思考のなかで，自分の部下を殺した放射能とその被害について部下に手伝わせて情報を得ようとする。もちろんインドの核兵器やミサイルについては新聞記事で知っていたがムンバイの北にあるトロンベイの核研究所やウラニューム，長崎，についてインターネットから情報を必死になって学ぶ。そしてガイトンデは，パキスタンとインドとの間で核戦争が起こるかもしれない，そうなればムンバイは確実に最初の標的となると語るが，ジョジョは非現実的だし，たとえそうなっても人間はいつか死ぬのだ，と取り合わない。そこでガイトンデは，密かに部下に命じ堅固な核シェルターをムンバイに作らせる。それはジョジョの為であった。しかしガイトンデ自身，タイ沖のヨットの上で，夜にはこの安全なシェルターを想像し，初めて安心して眠れたのであった。（G.G. pp. 757-760）

こうしてガイトンデは，グールーに最も近づいたと思った次の瞬間，実は，自分が恐ろしい謀略に利用されていたにすぎなかったことに気づいたのだ。これまでの分析からも判明するように，ガオトンデの心の奥底には，幼い頃に父と母を否定することによって満たされることの無かった愛情への凄まじい渇望が存在し，グールーは，それを見抜き，その渇望を満たすかのように振る舞い，自分を信頼させ，自分の計画に利用し，その計画にインド諜報部の調査の手が及び始めるや，彼を切り捨てたのである。グールーが，ガイトンデの生き方に批判めいたことをいわなかったのは，ヤクザの親分のままのガイトンデに利用価値があったからだと，今や判明する。では，その計画とは何か？ガイトンデは，今やその真相を突き止めるために，消えたグールーとその側近のサドーたちの行方を探ることに全力をあげるのだ。

「この世の終わり」

他方，ガイトンデの死を巡る謎を解明しようとするRAWとサルタージの側での調査も進展し，核を巡る謎と危険が解き明かされてゆく。RAWが，ガイトンデとグールーの関係についてのサルタージからの情報に基づき調査した結果，グールーが姿を消した後，教団では内紛が勃発し，殺人まで起き，大きく全国紙でも報道される。殺人現場の修行場からは偽札が発見され，一台のコンピュータが押収された。しかし，ハード・ディスクのなかの情報は暗号化され地元の警察の力では解読不能であった。しかし，贋金事件についての全国からのファイルを調べていたアンジャリはその事件のなかでグールーの名前が言及されているのに気づき，ハード・ディスクを手に入れ諜報部の知識によって解読したのである。そこからわかったことは，グールーの組織が核燃料廃棄物を国際的な闇市場で入手し，研究所や実験施設で使用され，公に購

入可能な質量分析装置を使って核兵器として使用可能な純度にまで何カ月にもわたり濃縮し，そして一つの装置を完成させたのだ。そしてその装置が，すでにムンバイに持ち込まれていることは，メールの交信や文書からも明らかなのだ。だが，ムンバイの市内のテラスのある家，という以外に何の情報もないのだという。そしてその場所を探すのがサルタージに課せられた任務だったのである。さらにクルカーニは，その他の情報として，ヒズブディーンというパキスタンに関係するイスラム原理主義的組織が作成したパンフレットを他の事件でも押収したのだが，そこには他でも大きなテロ攻撃を企てていることが書かれているが，今回のグールーに関する情報と合わせて考えると，この組織はグールーがでっち上げた組織であり，核爆発をイスラム原理主義団体の仕業にしようとしていると考えられる。そしてその装置が爆発するとムンバイ全体が滅びるかも知れない規模のものであると想定される，という。そして，RAW はムンバイのコラバ警察署に本部を置き，ムンバイに警告を発するが，核兵器についての情報は一切漏らさない方針である，という。（S.G. pp. 770-776）

サルタージに課せられた任務は，核兵器が隠されている場所を探しだし，確保することである。しかし，捜査は遅々として進まず，時間だけが過ぎてゆく。そうしたなかである日，イファット・ビビ（Iffat-bibi）から電話がかかってくる。この老婆は，スレイマンの母方の叔母にあたり，スレイマンのムンバイの責任者であるが，長い付き合いのなかでサルタージとの間には信頼関係がある。ビビは，警察がグールーとその仲間についての情報を求めて大騒ぎをしていることを知っていて，サルタージを自宅まで招くのである。ビビは，サルタージに，やつらの居場所を知っている，というのだ。だが彼女が居場所についての情報を警察に知らせるには交換条件があるという。それはサルタージの上司，パルルカーの首である。パルルカーはスレイマンとの関係を元に彼から得た情報を利用し出世を果たしてきたのだが，州議会選挙の結果，国民会議派が敗北し，Shiv Sena と BJP の連合州政府が樹立されたとなると，ムスリムのスレイマンとの関係を絶ったのみならず，スレイマンの金を大量に懐にしまいこんでいるという。だがビビが問題にしたのは信義でも金でもなかった。過去 4 カ月の間にスレイマンのトップの殺し屋が 7 人も警察の手で殺されたことである。ビビは確かな筋の情報として，それがパルルカーの新政府へのご機嫌取りによるものである，という。そして今ではスレイマンからの電話さえ無視しているというのだ。それを聞き，サルタージはパルルカーが連合州政府のもとで一時は大変な苦境に陥りながら，やがて復活した理由がわかったのである。ビビがサルタージを呼んだのは，グールーの居所についての情報と交換にパルルカーを失脚させる手助けをサルタジーに求めるためだったのだ。サルタージは核の脅威のことを説明し，事の緊急性を訴えるが，スレイマンはそれを罠だと信じないかもしれないと言われ，反論できない。サルタージは銃を構え，ビビを脅迫して情報を得ようとするが，ビビは，自分は知らないのだ，という。こうして万策尽きたサルタージは交換条件に応じる（S.G. pp. 789-795）

「ガイトンデ故郷に帰る」

グールーが兵器を持ち込みそれをムンバイで爆発させようとしていると危惧するガイトンデはグールーに直接真相を問いただしたいと思うがグールーとは連絡がとれない。そこでガイトンデはムンバイに戻り，自ら捜索隊を指揮し，インド全国を探しまわる。その結果辿り着いたのが，パンジャブ州のアムリッツアにあるベカヌール・ファーム（Bekanur Farm）である。グールーが使っていた帳簿によるとここで大量の金の出し入れが行われていたのだ。しかもグールーはこの農場についてこれまで一切語ったり，文章を残したりはしていない。つまり秘密なのだ。そこでガイトンデ一行は，いい土地を探しているデリーのビジネスマンを装い，その農場に行くことにする。そこはパキスタンとの国境に接する地域でフェンスによって隔てられている。ここまで読み進んで読者は，パキスタンとインドの国境線を行き来し，密輸入の通路として生業を立てている男を描いた「挿入章」の一節で，男が「どうしてあんなに大量のインド紙幣をパキスタンは手に入れたのだ？」とふとつぶやいたこと（S. G. p. 712）の意味がわかるのだ。つまりパキスタンで偽造された例のインド紙幣がこの男の手を経てフェンスを越えてグールーの手元に流れこんでいたのだ。

しかも農場の管理人の男は，ガイトンデの一行がこの農場を買うことに興味を持って内部を見て回るのに過度な警戒心を示す。有効なてがかりがないままに農場から去ろうとしていたガイトンデは農場に電線が何本も通じているのに気づく。何かがこの農場で行われているのだ。そこで急遽農場に戻った一行と管理人の男との間に戦闘が起き，管理人は殺され，彼らは電線がどこに通じているのかを頼りに家を探す。彼らが発見したのは地下の建物であり，そこには大量のインド紙幣が隠されていたのだ。

グールーとの最後の対決

ガイトンデはその紙幣を持ち帰る。するとそれまで連絡がつかなかったグールーからガイトンデの携帯に電話があり「お前は俺の金を取ったな」というのである。グールーはある計画を持っていてその達成のためにあの金が必要なのだという。ガイトンデは，その計画が，ボンベイで架空のイスラム過激派による核爆発を引き起こし，パキスタンとの全面的な核戦争を誘発させようという計画であることを問い詰め，そんなことをすべきではない，と言う。だがグールーはお前こそ，沢山の人間を殺してきたではないか？という。だがガイトンデはそれと，これとは違うと思う。ガイトンデは，うごめくアリの巣のような街が火に飲み込まれ，焼け焦げ滅び去ってしまう姿を思い浮かべる。この何百万という逃げ惑う人々はしがない，惨めな人生を送ってきた。そうした人々が全て滅び去った後の新たな出発。ガイトンデは，そうしたビジョンが彼がこれまで聞いてきたヒンドゥー教の教えのなかに確かにあったことを確信する。そして，全ての抹殺をグールーが企てていることを確信し，怖くなり，口がきけなくなる。それを

知ったグールーは，お前は弱いのだ，という。だが，その弱さは今日の人類全体の弱さであるという。グールーは，国連や紛争解決をめざす連中は，創造の為には完全な破壊が必要であることを理解していないのだ。パキスタンとインドの国境ではこの50年間大きな戦争を避け，恥ずべき小競り合いを繰り返してきた。皆，闘いを前にしり込みするアルジュナになってしまったのだ。そんなことはもう結構だ，とグールーは言う。しかし，そんなことをしたら全てが滅びてしまう，とガイトンデが反論すると，全ての偉大な宗教はこの終末を予言してきた，お前が作った映画のタイトルは何だったのか考えてみろという。それは大クライマックスという意味のDhamakaだったではないか？この世のあらゆる兆しは終わりを必要としている。人はどうせみんな死ぬ，少しぐらい早くても何が問題なのだ，こんな汚い世界は早く滅びるほどいいのだ，という。その言葉を聞いてガイトンデは，グールーのやろうとしていることをやめさせよう，と思う。しかしグールーは，お前のおかげでセキュリティの技術を俺は学んだし，お前が俺を見つけることはできない。お前は俺の金を奪ったがそれは計画の実現を遅らせるだけだ，不可避なことはいずれ起きるのだ，こんな汚い世界は早く終わるにこしたことはないのだ，とグールーは言い放つ。そして電話は切れてしまう。（S.G. pp. 800-839）

こうしてガイトンデは彼がムンバイに建てた核シェルターに入ることにする。彼はムンバイを故郷と考え，それが滅びることに耐えがたい思いをもち，核シェルターのなかからグールーと闘おうと考えたのである。

ガイトンデの絶望と死

では，何故ガイトンデは，グールーとの闘いより，死を選んだのであろうか？それは，彼をこの世に繋ぎ止め最後の絆を失ったからである。ガイトンデがそのような絆として考えていたのは，ジョジョであった。核が爆発したとき自分は生き残れるが，ジョジョは死ぬ。ガイトンデはジョジョのいない世界など考えられなくなっていたのである。そして部下にジョジョをスタンガンを使い無理やりシェルターに連れてこさせ，彼女を説得しようとする。ガイトンデは長いジョジョとの取引と電話での会話から，いつしか，自分とジョジョは一体であり，お互いに必要としあっているのだ，と一方的に思い込んでいたのである。しかし，ジョジョの側では最初からそうは思っていなかったことがわかってくる。ジョジョはガイトンデと二人きりでこの地下空間に暮らしてゆくということには耐えられなかったのである。ジョジョはいう。あんたは女を買って自分はひとかどの男だと思っていたかもしれないが，誰ひとりとしてあんたを好きだと思った女はいない。あんたはゾヤがあんたにぞっこんだと思っていたかも知れないが，ゾヤはあんたと寝てよかったことは一度もないと言っていた，という。ガイトンデは，それは嘘だ，というが，ジョジョは，それはあんたじゃない，ゾヤはヴァイアグラをあんたに飲ませただけなんだ，そしてジョジョは，ゾヤはそもそも処女じゃなかった，あんた以前にも沢山を

男を知っていて，しかもあんたは，そのなかで最低だった，と言っていたんだ。だが，彼女は確かに処女だった，血が流れたんだとガイトンデがいうと，ゾヤは手術で処女になっただけなんだ，そんなことは簡単なことで，数週間もしたら，ガイトンデのような小さな男根の男の前で足を開けたんだ，という。次の瞬間，ガイトンデはジョジョを撃ち殺していたのである。（S.G. pp. 841-856）

そしてガイトンデが最後に考えたのは，誰かにグールーのこの計画について打ち明ける必要があるということだった。そしてガイトンデの心に浮かんだ唯一の人間がサルタージだったのである。それは何故か，それはかつてムンバイでのグールーの儀式の際，つかの間会ったサルタージだけが，ヤクザの親玉としてではなく，人間として自分を見てくれたと感じたからだった。そしてガイトンデは，サルタージを呼び，彼の物語を語ろうとしたのだ。しかし，逮捕を焦るサルタージは最後までガイトンデの話を聞かずブルドーザーを用意し，建物に入ろうとし，ガイトンデは自殺をしたのである。

他方，パルルカーと引き換えにビビからグールーの居場所を知ったサルタージは，核兵器を発見することができ，ムンバイの危機を救うことになる。他方，サルタージはビビとの約束を果たすために，パルルカーとスレイマンに自宅の寝室の電話を使って話をさせ，それを録音し，世間に公表し，パルルカーの社会的生命を断つ。パルルカーはそののち姿を消すが，自宅で自殺しているのが発見されるのである。（S.G. pp.866-877）

まとめ

ブラーミンの家系に生まれながらも無能な父と，美しいが不実な母についての屈辱の思い出を記憶の奥底に押し隠し，故郷を無一文で去り，ヤクザの世界に生きるすべを見出したガイトンデは，裏切りによって得た資金を元手にムンバイでの成功を目指すのだ。幼年時代の屈辱感を強烈な上昇志向や野心に変え，人を率い，従わせる大胆さ，賢さ，強さを兼ね備えたガイトンデは，ムンバイのヤクザの世界でたちまち頭角を表し，ヤクザ間のシマ争いに突き進んで行き，ムンバイの闇社会の一角を占める組織を作り上げる。その過程で，ガイトンデは，警察や政治家との間に相互に利用しあう依存関係を形成して行く。そしてアヨーディア事件の後，ムンバイを吹き荒れるヒンドゥー教徒によるムスリムに対する宗派暴動のなかで，それまで宗派的感情に左右されなかったガイトンデも，ヒンドゥーのヤクザの親分としてのアイデンティティを引き受けざるを得なくなり，ヤクザとしてのシマ争いもまたヒンドゥーの親分対ムスリムの親分の戦いという様相を帯びてくる。

こうしたなかで次にガイトンデは，ヒンドゥー・ナショナリストの政治家の依頼で，ムスリムの攻撃に備えようとするヒンドゥー・ナショナリストのために武器を密輸するという仕事を

引き受け，その依頼元であるヒンデゥー教のグールーと出会い，やがてガイトンデはそのグールーに引きつけられてゆく。ガイトンデは知らずして，幼い頃に求めて得られなかった父親像をグールーに投影していたのであろう。しかし，ガイトンデは自分がそのような弱みを掴まれ，グールーのヒンドゥー・ナショナリストとしての恐るべき謀略に利用されていたことを知る。

グールーの謀略の背景にあったのは，ヒンドゥー教の終末論である。グールーは，現代をカリ・ユガ（Kali Yuga）と捉える。すなわち，この世の4つのステージのなかの最後のステージとしての最悪の時代と捉え，この時代には大戦争が起こり，世界の悪を滅ぼし，その後に黄金時代が訪れる，というのである。そして，そもそもこの世とは絶えざる創造的破壊の繰り返しであり，大戦争はその為の破壊であると位置づける。その背後にあるのは，この世の醜さへの嫌悪であり，そのラディカルな否定の感情と救いへの主観的願望だろう。この世は意識であり，意識がこの世を変えるのだ，というヒンデゥー教のアートマンの教義が，その主観的願望を支えている。そしてそれが多くの人命を犠牲にするという反対論に対しては，我々がリアルだと思っている多くの人が生活しているこの世界は実は幻想である（この世はヴィシュヌ神のまどろみである）とグールーは語る。

このような思想の現代ヒンドゥー・ナショナリズムのなかでの位置づけについては今後の課題としたい。いずれにせよ，ガンジーの思想もまたヒンドゥー教の伝統を源泉としており，ヒンドゥー教の伝統のなかから何を本当に現代に継承するのか，という課題はキリスト教の場合と同様に，信仰心の篤いインドにおいて焦眉の現代的課題であろう。

他方，ガイトンデに接近していたインドの諜報部は，グールーが姿を消してしまう頃からガイトンデを見失ってしまうが，ガイトンデの核シェルターでの謎の死後，ガイトンデが関わっていたスキームの実態に次第に迫ってゆく。そして，ヒンドゥー・ナショナリストの一派がインドのイスラム過激派を装ったテロリスト集団をでっち上げ，資金をパキスタンの諜報部から集め（それはパキスタンが発行していた偽インド紙幣だったのだ），ガイトンデを利用し核爆弾を作るのに必要な物資を運ばせ，ムンバイで核爆発を起こし，インドとパキスタンとの間の核戦争を勃発させようとしていることを知り，サルタージを通じて事件の解決を図る。

そのようなガイトンデとグールーを巡る直接の事件にとどまらず，『聖なる』に特別の深みを与えているのは，インドとパキスタン双方の諜報部員の過去と現在を描いた「挿入節」である。とりわけインドの諜報部員 K.D. ヤダフの生涯は興味深い。中印戦争後，インドの国家建設を揺るがした様々な問題や紛争に諜報部員とし使命感を持ってかかわり，歴史の表面に決して現れない形で結果を残してきたヤダフは，病院での死を前に，暗殺に明け暮れてきた人生に一抹の空しさを抱いて死んでゆくのである。

他方，物語の最後に置かれているガイトンデの自殺の真相も妙味深い。グールーに裏切られたガイトンデがこの世の終末を思い描いた時に唯一，一緒にいることを望んだのがジョジョで

あった。しかし，ガイトンデは，結局ジョジョにも，そして自分が世に出した女優との「愛人関係」も，実は利用されていただけであった，という事実をジョジョに突き付けられ，その冷酷な事実と自分が突き落とされた孤独に耐えられず，彼女を殺し，自分も自殺するのである。ガイトンデは，両親から与えられなかった愛情と誇りの結果としての孤独とコンプレックスをバネに手段を選ばず裏社会を生き抜いてきたのだが，その結果，本当の意味で信頼され愛される生き方から遠ざかっていたのである。

注

1）"Citing security fears, Rushdie won't attend Literary Festival," V. Bajaj & S. Gottiati, *New York Times*. 2012, Jan. 20. Retrieved from http://www.nytimes.com/2012/01/21/world/asia/salman-rushdie-backs-out-of-india-literary-event-citing-security.html.

2）Salman Rushdie, Wikipedia, Retrieved from http://en.wikipedia.org/wiki/Salman_Rushdie.

3）近藤則夫は『インド民主主義体制のゆくえ：多党化と経済成長の時代における安定性と限界』（調査研究報告書　アジア経済研究所　2008 年）の第 6 章において両者を定義して，「ヒンドゥー多数派の価値観や社会制度にそって国家を作ろうとする運動を「ヒンドゥー・コミュナリズム」とすべきか「ヒンドゥー・ナショナリズム」とすべきか，当てはめる「ラベル」によって現実の政治においても運動の評価に大きな違いを生む。本稿では排外性，敵の排除を強調する場合に「コミュナリズム」を，包括的統合的な「ネーション」を作ろうとするものである場合「ナショナリズム」という概念を当てることとする」と述べているが，私もそれに従う。

4）チャンドラについての伝記的事実, 受賞歴, 書評等についての情報は本人の HP から得ることができる。http://www.vikramchandra.com/.

5）Vikram Chandra, *Sacred Games*, Faber & Faber Limited Bloomsbury House, London, 2006.（なお，本論中での本書についての引用箇所，あるいは，その部分の大意の範囲は，（S.G. 該当ページ）という形で示す。

6）ムンバイの犯罪社会（organized crime in Mumbai）については様々な website がある。"Mumbai's mafia war" は『聖なる』と同様にヤクザ組織の抗争が宗派対立の様相を帯びてきていると論じている。http://www.frontlineonnet.com/fl1607/16070420.htm　また，V.S. Naipaul は *India: A Million Mutinies Now*, Viking Penguin, 1991. pp.73-75 のなかでムンバイのヤクザの中堅幹部とのインタビューを行っている。

7）T.B Hansen, "Governance and State Mythologies in Mumbai", *State of Imagination: Ethnographic of the Postcolonial States*, Ed. Hansen, T.B & Steptat, F. ,Duke University Press, Durham & London, 2001. P.222.

8）"Bombay Noir," Pankaj Mishra, *The New Yorker*, Jan. 15, 2007.

9）この作品についての様々な書評にも異口同音にそのような指摘がなされている。たとえば，Paul Gray は，この小説を水泳教師にたとえ，泳ぎを知らない生徒をいきなり海に放り出すタイプの教師だという。*New York Times Sunday Book Review*, "Gangsta Raj," Jan. 7, 2007.

10）「インドが読む『インド英語小説』」関口真理　英語青年 2007 年 1 月号。

11）「ほぼ最後にガンジーとジンナーは 1947 年の 5 月に会見し，それ以前と同様に意見が一致しないまま別れた。ガンジーの同意を得てジンナーが発表した声明でジンナーはこう述べた。・・・ガンジーは分離という原則を受け入れなかった。ガンジーは分離は不可避であるとは考えないと考えるが，私の意見では，パキスタンの建設は不可避であり，インドの政治的問題の唯一の現実的な解決である」。Jaswant Singh, *Jinnah: India-Partition-Independence*, Oxford University press, 2010, pp.360-361.

12）佐藤・中里・水島著『世界の歴史 14 －ムガール帝国から英領インドへ』中央公論社　2009 年　pp.111-120。

13）B.D. メトカーフ & T.R. メトカーフ著『インドの歴史』創土社　2006 年 p.171。

14）Jaswant Singh, (Ibid), pp.38-49.　シングによれば，「分離」を目指す指向性が生まれた決定的な事件は 1906 年，当時インド総督であったミント卿が，ムズリムの代表（これが同年のムズリム連盟につながる）と会い，近く実施される予定であったインド参事制度においてムスリムの代表をムスリム社会から選挙で選ぶという代表団の提案を支持し，モーリー・ミント改革となったのである。シングは、この制度がその目的を首尾よく達成し得たので、10 年後、ミント卿の後継者であるインド担当国務大臣モンタギューとインド総督チェルムスフォードは、宗派別選挙制度が「（宗教的＝筆者）信条と階級による分割は相互に対立する政治陣営を作りだし、市民としてではなく、党派的人間として考えるように人を仕向けるのだ」（p.43）と述べたと言っている。他方、ガンジーは 1932 年のロンドン円卓会議の際、「モーリー・ミント改革は我々の失敗の原因となった。その時導入された宗派別選挙制度がなかったならば、我々はムスリムとヒンドゥーの対立を今頃解決しているはずであった」(p.45) と述べたという。

15）（同上）『インドの歴史』では，暴動の背景としての組織的扇動者の存在について言及されている。p.312。

16）同上，同書によれば数十万から百万人が殺害され，ヒンドゥーとムスリムの双方合わせて千万を超える人々が移住した。pp.317-318。

17）*The Man Who Killed Gandhi*, Manohar Malgonkar, Roti Books, 2008. 参照。

18）*India after Gandhi: The History of the World's Largest Democracy*, Ramachandra Guha, Harper Collins, 2007, Riots, p.635.

19）Ibid., pp.573-575.

20）Ibid., p.575.

21）Ayodhya dispute, Wikipedia. Retrieved from http://en.wikipedia.org/wiki/Ayodhya dispute.

22）「インド民主主義体制におけるヒンドゥー・ナショナリストの政治戦略の変容 - 独立後のインド政治の展開と BJS/BJP の戦略的動向を中心に」中津雅昭 P.51 H 16 年。daigakuin.soka.ac.jp/assets/files/pdf/major/kiyou/16_houritsu1.pdf。

23）Guha, 2007, pp.576-577.

24）近藤，2008 年, p.225。

25）Guha, 2007. p.577.

26）Ibid., p.579.

27）Ibid., pp.626-627.

28）Engineer, A.A., "Press on Ayodhya 'Kar Seva', "*Economic & Political Weekly,* May 18, 1991. Retrieved from http://www.jstor.org/discover/10.2307/4398024?uid=3738328&uid=2129&uid=2&uid=70&uid=4&sid=47698831105367.

29）Guha, 2007, pp.628-630.

30）Ibid., 2007, pp.632-633.

31）Ibid., 2007, pp.633-634.

32）Ibid., pp.646-648.

33）Chart 1: Literacy rate by sex in India since 1951. Retrieved from http://www.literacyportal.net/india/resources/studies_reports/mapping_literacy.pdf.

34）Ibid., p.430.

35）Ibid., pp.599-604.

36）*Kanthapura*, Raja Rao, Oxford University Press, 1989, pp.72-74.　参照。

37）*India: A Millions of Mutinies Now*, Viking Penguin, 1990 の第一章では科学技術者を目指したが夢破れた青年がシブ・セナの幹部になって行く姿が，対話によって明らかとされている。

38）"David Headley alleges Pakistan role in Mumbai attacks," BBC News us & canada, 23 May 2011. Retrieved from www.bbc.uk/news/world-us-canada-13506041. この裁判のなかで 2008 年のムンバイ攻撃作戦において，パキスタンに雇われていたという Headley は次のような証言をしている。

> "At the opening on Monday of Mr Rana's trial, Headley testified that Pakistan's Inter-Services Intelligence agency（ISI）and militant group Lashkar-e-Taiba (LeT) coordinated with each other.
>
> The ISI provided military and moral support to the group, he said.

39）ムンバイで強力な権力と富を築いたヤクザの親分の生き方はマスコミの注目することとなり，多くのインタビューが現実に新聞に載っているのである。すでに言及したナイポールの *India*（1990 年）においてナイポールはそのような状況に触れながらヤクザの中堅幹部とのインタビューを行っている。

40）*The White Tiger*, Aravind Adiga, Free Press, A Division of Simon & Shuster, Inc. New York, 2008.

41）Guha, Ibid., pp.672-674.

42）Wikipedia "Intelligence and Analysis Wing" http://en.wikipedia.org/wiki/Research_and_Analysis_Wing

43）次のウエッブ・サイト参照　http://en.wikipedia.org/wiki/Sathya_Sai_Baba。

（加藤　恒彦，立命館大学国際関係学部教授）

A Study of *Sacred Games* by Vikram Chandra: Focusing on Communal Conflicts between Islamic Fundamentalism and Hindu Nationalism

Sacred Games (2006) by Vikram Chandra won various literary prizes and became an international bestseller after its publication. However, book reviews dealing with this novel do not seem to pay appropriate attention to its important aspect of communal conflicts, especially the Hindu nationalist conspiracy to bring about total nuclear warfare between India and Pakistan, based upon the apocalyptic vision of Kali Gura.

Given that such a controversial issue is somewhat alien to Japanese readers, the author of this paper felt it necessary to give the historical context to this problem in terms of providing a brief history of the conflicts between Hindu and Muslims in India and in India and Pakistan after the partition, especially focusing upon the communal violence resulting in the destruction of the Masjid Mosque in Ayodhya in 1992 and its aftermath in various places in India.

The protagonist of this novel, Ganesh Gaitonde, who is the rising boss of G-Company, one of the leading mafia organizations in Mumbai, in the midst of communal riots raging in Mumbai as an aftermath of the destruction of the Masjid Mosque at Ayodhya, gets involved with the Hindu communalism pressed by his Hindu underlings who want their boss to be the Hindu boss. His commitment to the communal issue then leads him to further involvement in a conspiracy to illegally import weapons for Hindu extremists in preparation for the coming fights against Muslim terrorist organizations in India at the request of a Shiv Sena-like politician in Mumbai. This collusion turns out to be part of a much larger scheme promoted by a world-famous Hindu guru by whom Gaitonde became entrapped due to his childhood loss of his ineffectual Brahmin father and his beautiful but faithless mother as well as his desperate need to seek a father-figure in the Guru.

Another focus is upon the intelligence war between India and Pakistan represented by K.D. Yadav on the Indian side and Major Shahid Khan on the Pakistan side. This strand of the novel reveals, above all, hidden historical depth of the activities of the Indian State in building up peace and order in the newly independent country.

（KATO, Tsunehiko, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University）